

千葉県文化財センター

研究紀要

17

平成9年3月

財団法人 千葉県文化財センター



小銅鐸



銅鏡 (振文鏡)



銅鏃



帶金具



耳環

発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。

その成果は、発掘調査報告書をはじめ、多数の刊行物等にみられるとおりです。また、研究活動につきましても、研究紀要の刊行をはじめとして、調査に関連する独自の研究事業を行ってまいりました。

昭和62年度からすすめてまいりました「房総における生産遺跡の研究」を統一主題とする活動も、平成5年度をもって終了し、その成果は4冊の研究紀要としてすでに報告されております。また、創立20周年記念論集として16号を刊行いたしました。このように研究事業の中心である研究紀要も本年で17冊目を刊行する運びとなりました。

本県は、発掘調査により数多くの青銅製品が出土しております。そこで、その生産と流通の実態を探るため、当センターが調査した遺跡や県内各地の遺跡から出土した小銅鐸や鏡をはじめとして銅鏃、耳環、帯金具などの青銅製品の集成と分析を平成2年度から継続して実施してまいりました。

このたび、その成果を「県内の青銅製品の集成と分析」と題して取り上げ、いくつかの視点から検討を加え、研究紀要17号として刊行することとなりました。

本書が、考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として広く活用されることを期待してやみません。

平成8年9月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村好成

目 次

県内の青銅製品の集成と分析

発刊の辞	理事長 中 村 好 成
はじめに	3
I 序 論	7
1. 研究の現状と課題	7
2. 文献解題	22
II 県内出土青銅製品の集成	111
1. はじめに	111
2. 集成と方法	112
3. 集成一覧	114
(1)容器	114
(2)調度品	115
(3)装身具	115
(4)帯金具	125
(5)鏡	131
(6)武器・武具	134
(7)馬具	139
(8)飾金具	141
(9)宗教・祭祀関係	143
(10)銭貨	145
(11)その他と不明品	161
4. 参考文献一覧	165

III	県内出土青銅製品の科学分析	179
	1. はじめに	179
	2. 銅製品の分析の目的と方法	181
	3. 分析の実施	186
	1) 今回行った分析方法	186
	2) 分析結果	189
	4. 分析結果に基づく考察	200
IV	まとめ	209

挿図目次

第1図	青銅製品調査記録カード	113
第2図	帯金具・銭貨の計測	113
第3図	分析遺物実測図(1)	191
第4図	分析遺物実測図(2)	197
第5図	時代別成分組成	202
第6図	種類別組成 弥生時代	202
第7図	種類別組成 古墳時代	203
第8図	種類別組成 奈良時代以降	203

表目次

第1表	分析実施項目一覧	199
第2表	定量分析値一覧 弥生時代・古墳時代	206
第3表	定量値一覧 奈良時代以降	207
第4表	県内鋳銅関係遺跡	209
第5表	分析条件	

図版目次

巻頭図版1	小銅鐸
巻頭図版2	銅鏡(振文鏡) 銅鏃
巻頭図版3	帯金具 耳環

- 図版 1 分析遺物写真 1
- 図版 2 分析遺物写真 2
- 図版 3 草刈遺跡I区 小銅鐸 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版 4 草刈遺跡F区 指輪 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版 5 泉北側第2遺跡 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版 6 石揚遺跡 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版 7 石揚遺跡 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版 8 石揚遺跡 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版 9 石揚遺跡 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版10 椿3号墳 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版11 椿3号墳 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版12 椿3号墳 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版13 椿3号墳 銅鏃 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版14 草刈遺跡D区 銅鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版15 俵ヶ谷4号墳 銅鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版16 俵ヶ谷4号墳 銅鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版17 俵ヶ谷4号墳 銅鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版18 馬ノ口5号墳 刀装具 蛍光X線スペクトル
- 図版19 久我台遺跡 耳環・高沢遺跡 丸柄鋌 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版20 高沢遺跡 耳環 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版21 池向8号墳 耳環 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版22 池向8号墳 耳環 鍍金層の断面状況
- 図版23 池向8号墳 耳環 鍍金層断面の蛍光X線スペクトル
- 図版24 池向4号墳 耳環 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版25 池向4号墳 耳環 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版26 請西大山台遺跡 耳環 蛍光X線スペクトル
- 図版27 請西大山台遺跡 耳環 蛍光X線スペクトル
- 図版28 請西大山台遺跡 耳環 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版29 諏訪谷横穴 耳環 蛍光X線スペクトル
- 図版30 小金沢3号墳・高沢遺跡・池向8号墳 耳環 蛍光X線スペクトル
- 図版31 白幡前遺跡 丸柄 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
- 図版32 白幡前遺跡 丸柄 蛍光X線スペクトル及び面分析写真

- 図版33 白幡前遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版34 白幡前遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版35 権現後遺跡 巡方 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版36 権現後遺跡 巡方 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版37 権現後遺跡 巡方 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版38 権現後遺跡 巡方 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版39 権現後遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版40 権現後遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版41 権現後遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版42 権現後遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版43 高沢遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版44 高沢遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版45 高沢遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版46 高沢遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版47 高沢遺跡 丸靱裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版48 高沢遺跡 丸靱裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版49 高沢遺跡 丸靱裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版50 高沢遺跡 丸靱裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版51 高沢遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版52 高沢遺跡 丸靱 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版53 高沢遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版54 高沢遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版55 高沢遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版56 高沢遺跡 鉦尾裏金 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版57 木戸下遺跡 刀装具 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版58 吉原三王遺跡 銅鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版59 吉原三王遺跡 合子蓋 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版60 吉原三王遺跡 和鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版61 吉原三王遺跡 和鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版62 久我台遺跡 和鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真
図版63 大台遺跡 和鏡 蛍光X線スペクトル及び面分析写真

県内の青銅製品の集成と分析

はじめに

資料部長 築比地 正 治

財団法人千葉県文化財センターは、創立以来、埋蔵文化財の発掘調査とともにこれに係わる研究活動を主要な業務として積極的に実施してきた。個々の研究は、日々、各々の調査現場、また報告書の作成等それぞれの場において常に行われているが、それとともに当文化財センターとして一定の主題のもとに共同研究を行ってきた。この共同研究の成果は『千葉県文化財センター研究紀要』（以下研究紀要と略す）として逐次刊行され、一定の評価を得ているものと自負するところである。研究紀要は文字どおり職員の研究成果を世に問うもので、昭和51年に第1号を刊行して以来今回で17号をかぞえる。この間、昭和61年3月に創立10周年記念号を、平成7年1月には創立20周年記念号を、それぞれ記念論集として刊行したのを除いて特定の主題によるシリーズとして刊行され、第Ⅰ期(第1号～第5号)は「考古学から見た房総文化の解明」という主題のもとに5冊にわたっていわゆる原始古代の房総文化の解明を試み、あるいはそのための資料の集成を行った。第Ⅱ期は「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究」として自然科学的分析の考古学分野への応用に関する問題について研究し、その成果を昭和56年度(第6号)から昭和61年度(第11号)までの間に刊行した。昭和62年度からは第Ⅲ期として「生産遺跡の研究」を統一主題に掲げ、生産・流通・消費に関する諸問題を、考古学からばかりではなく様々な視点から検討し、平成6年度までに4冊の成果(第12号～第15号)として上梓してきた。

このような統一主題による一連の研究活動とは別に、これまで未着手であった青銅製品についての研究の必要性が検討され、平成2年度から「県内の青銅製品の集成と分析」という主題が設定された。遺跡から出土する鉄製品は、すでに多くの報告書・論文等で言及され、製鉄遺跡についても『研究紀要』第7号などで自然科学的分析をふまえて研究成果を公表し、着実に実績をあげてきたものと考えている。しかし、金属器文化を担ってきたもう一方の代表的な存在である青銅製品の研究は、ほとんど未開拓な状態であった。遺跡から時折出土する遺物についての個別的な検討や自然科学的分析の成果はあるものの、総合的な集成や分析が十分に行われてきたとは言い難い。折しも、昭和57年に市原市天神台遺跡において県内初の小銅鐸が出土したのを嚆矢として、昭和59・60年に当センターが調査を実施した市原市川焼台遺跡でも発見され、現在までに8例を数えるに至った。このことは、これまで関西や九州北部など青銅器研究の先進的地域を中心に論ぜられてきた諸問題を、本県においても本格的に検討する必要性を

提示することとなった。さらに、千葉市谷津遺跡では工房跡や鋳型、坩堝、銅粒など銅鑄造に関係する遺物が確認され、各地で鏡、銅鏃、帯金具等の出土例も増加するなど、青銅製品を研究する環境が次第に整ってきた。そこで、解明すべき課題は多岐にわたるが、まず県内各地において、これまでに出土した青銅製品の基礎的な集成を可能な限り行い、そのなかから良好な資料を抽出して科学的な分析を実施し、検討を加えることにした。持続的・長期的な研究の発展を促すためには、基礎的な作業を第一の課題とすることは異論のないものとする。

この共同研究活動は、平成2年度から研究部(平成5年度からは調査研究部資料課)の兼務業務として、別に記す職員を中心に鋭意調査・研究を重ねてきたところであるが、今回その成果をまとめて研究紀要17号として刊行するにいたった。

ここで改めて言及するまでもないが、青銅器は銅と錫とを主成分とする合金で製作された利器や儀器・装身具などのことである。考古学でいう青銅器は、本来の意味での青銅だけではなく、錫をあまり含有しない銅合金や、銅とその他の非鉄金属(砒素、アンチモン、銀など)との合金も含めている場合が少なくない。本紀要においても、厳密な意味での青銅器に限らず、広く銅を素材にした製品や金銅製品なども含めて青銅製品として取り扱っているが、対象とする時代は、原則として弥生時代から奈良・平安時代に限定した。ただし、遺跡から発掘された仏像など、重要と判断される資料については、中世以降の製品も一部含まれている。

また、銅鏃、耳環、帯金具などのなかから、良好な資料を選んで自然科学的分析を実施した。このような分析には、産地同定を目的とする方法と製品の成分分析を目的とする方法がある。今回はこのうち、基礎的なデータの取得と青銅製品の製作技術の一端を探ることを目的として、成分分析を川鉄テクノリサーチ株式会社に委託した。資料の重要性を考慮して、非破壊で分析を実施するという制約はあったが、一定の成果は得られたものと考えている。

本書の刊行、それに先行する共同研究において、奈良国立文化財研究所、(勅)大阪府文化財調査研究センター、奈良県立橿原考古学研究所、京都造形芸術大学、関西文化財調査会には、銅鑄造関連の資料や銅製品分析についての多くの有益な御教示をいただいた。また、未発表の資料について、(勅)千葉市文化財調査協会、市原市埋蔵文化財調査センター、史跡上総国分尼寺跡展示館、(勅)君津郡市文化財センター、(勅)山武郡市文化財センター、(勅)印旛郡市文化財センター、(勅)香取郡市文化財センターには特段の便宜を図っていただいた。さらに、千葉県立房総風土記の丘からは分析データの提供を受け、県内各機関には収蔵する青銅製品についてのアンケートに回答をお寄せいただいた。そのほか、今回の青銅製品の研究にあたっては、多くの関係機関および個人の方々の御指導、御協力をいただいた。機関名・御芳名を掲げ、各位の御協力について深く感謝の意を表するものである。

〈協力機関〉（順不同）

奈良国立文化財研究所、(財)大阪府文化財調査研究センター、奈良県立橿原考古学研究所、京都造形芸術大学、関西文化財調査会、千葉県立房総風土記の丘、市原市埋蔵文化財調査センター、史跡上総国分尼寺跡展示館、佐倉市教育委員会、印西市教育委員会、佐原市教育委員会、下総町教育委員会、市川市教育委員会、船橋市教育委員会、八千代市教育委員会、柏市教育委員会、我孫子市教育委員会、鎌ヶ谷市教育委員会、山武町教育委員会、銚子市教育委員会、(財)千葉県文化財調査協会、(財)君津郡市文化財センター、(財)山武郡市文化財センター、(財)印旛郡市文化財センター、(財)香取郡市文化財センター

〈協力者〉（順不同、敬称略）

小林謙一、小池伸彦、村上 隆、花谷 浩、西口壽生、赤木克視、江浦 洋、中井一夫、内田俊秀、吉川義彦、池田善文、高木博彦、岡田誠造、山口直樹、米田耕之助、大村 直、近藤敏、田中茂良、青沼道文、村田六郎太、小澤清男、原田享二、小林清隆、金丸 誠、小石 誠、豊巻幸正、能城秀喜、大久保奈奈

巻頭図版の撮影は、堀越知道氏による。

本書が県内外を問わず、今後の青銅製品の研究にいささかなりとも役立つところがあれば幸いである。各位からの御指導と御鞭撻を期待するとともに、広く活用されることを願うものである。

本書の構成・編集および平成2年度から平成7年度までの間の共同研究のとりまとめについては調査研究部資料課主任研究員（平成4年度までは研究部長補佐）渡辺智信がこれにあたった。本書の担当者、執筆分担は以下のとおりである。

〈担当者〉

平成2年度	服部哲則
平成3年度	加藤修司、麻生正信、福田明美
平成4年度	加藤修司、麻生正信、福田明美
平成5年度	麻生正信、岡田光広、立和名（福田）明美
平成6年度	関口達彦、蓐 淳一、立和名明美、森 恭一
平成7年度	関口達彦、蓐 淳一、立和名明美

〈執筆分担〉

蓐 淳一	I
関口達彦	II
立和名明美	III、IV

I 序 論

1. 研究の現状と課題

銅製品の歴史

人類の誕生は数百万年前にさかのぼると言われる。しかし、人類が金属を発見し、それをもとにものをつくるようになったのは、そう古いことではない。人類が初めて利用した金属は銅であろうと広く言われている。もっとも古い銅製品は、西アジアのトルコからイランにかけての地域で8000～9000年前のものがみつまっている。同じくもっとも古い銅の製錬遺跡は、イランで6000～7000年前ころのものがみつまっている。もっとも古い鑄銅遺跡は、メソポタミアで6000～7000年前ころのものがみつまっている（松丸・松谷 1993）。鉄の利用の始まりは銅に遅れる。

日本で銅の利用が始まったのは弥生時代で、約2300～2400年前のことである。銅の利用は中国・朝鮮から伝わった。そこで、中国・朝鮮における銅の利用の歴史からみてみよう。

銅の利用は中国から朝鮮へと伝わった。中国での銅の利用の始まりについては、メソポタミアから中央アジアの草原地帯を経て伝わったのだとする説と中国で独自に始まったのだとする説があるが、結着はついていない（松丸・松谷 1993）。中国とメソポタミア周辺との交流の歴史は、今から約3000～4000年前までさかのぼることが、馬車の繋駕具などの遺物の共通性から確かめられている。中国では、たしかに古い銅製品が出土している。最古の銅製品は、陝西省の姜寨遺跡の住居跡から出土した銅片で、今から約6000年前のものである。ただし、材質が青銅ではなく黄銅（真ちゅう）であることから、本当に古いものか疑問が出されている。銅の利用が始まってすぐに青銅はつくられるようになったが、黄銅がつくられるようになったのは亜鉛が製（精）錬できるようになった近世からという説が有力なためである。最古の銅製品として異論がないのは、甘肅省東郷林家遺跡で出土した青銅製の小刀で、今から約5000年前のものである（杜 1995）。

今から4000～5000年前になると、中国では、利器・装飾品のほか鏡などかなりの数の銅製品が現われる。出土遺跡は、山東省・河南省・河北省・山西省・甘肅省とその周辺の広い範囲にわたっている。しかし遼寧省などの東北地方、河南省より南側の地域ではみつからないことは注目される。材質は、純銅または青銅であり、製錬、精錬、鑄造の跡もみつまっている（杜 1995）。しかし、銅製品の生産量は、まだわずかであったと思われる。

中国で銅製品の生産が本格的におこなわれるようになったのは、殷（商）代の前期と考えら

I 序論

れる二里頭期で、今から約3500～4000年前と考えられる。二里頭期については、殷代の前にあった『史記』などに記す夏代にあたるのだという意見もあるが、夏代だとするには殷代の存在を裏付ける甲骨文のような文字による明らかな根拠がない。二里頭期以後、銅製品は珍しいものではなくなる。二里頭期には、新たに青銅製の容器がつくられ始め、それ以後の銅製品は、ほとんどが青銅製である。

殷代とそれに続く西周時代は、中国における青銅器の歴史の上で、最も華やかな時期にあたる。今から約3000～4000年前のことである。祖先祭祀のための礼器において、中央の王室の工房が技術や装飾の面ですぐれた水準の製品をつくり出してリードし、各地方の諸侯の工房も、中央の製品を模倣する一方、独自色を発揮して多くの製品をつくり出している。また、北西方の草原地帯の騎馬民族と、製品の交易や装飾意匠の交流を通して互いに影響し合った。

紀元前770年に西周時代が終わり春秋時代になっても、青銅器は盛んにつくられた。礼器では、地方ごとのちがいが一段と大きくなる(李 1991)。

中国において、鉄製品が本格的に生産され始めるのは、春秋時代末から戦国時代にかけてのことで、今から約2400～2500年前である。しかし、青銅製品は、そのほとんどの種類にわたって鉄製品に取って代わられてしまうことなく、漢代にも盛んにつくり続けられたのである(李 1991、王 1984)。生産された鉄製品は農具・工具・武器を中心としていて、礼器・鏡などは依然として青銅製品のままであった。鉄製品の普及は青銅製品との交替に注目するよりも、金属製品の一層の普及、一般化として評価すべきであるように思われる。

さて、朝鮮における銅の利用は、中国の東北地方の遼寧省・吉林省の一带から青銅器文化が伝わって始まった。今から約3000年前のことである。それは遼寧式銅剣文化または遼寧青銅器文化と呼ばれ、西側のオールドス青銅器文化を通じて、ユーラシア草原地帯の騎馬民族の青銅器文化とつながりをもっている。前述のような中国の中心部の青銅器文化とは、かなりちがった内容で、剣・刀子・馬具を代表とするものであった。やがて、遼寧式銅剣文化から、朝鮮独自の青銅器文化が生まれてくる。それは今から約2700～2800年前のことである(岡内 1991ほか)。

日本における銅の利用は、弥生時代の初頭に朝鮮製の銅製品のまとまった流入によって始まる。また鉄の利用もほぼ同時に始まった。朝鮮製と並んで中国製の銅製品も流入して来た。やがて、日本においても弥生時代の中期には銅製品の生産が始まる(岩永 1990ほか)。

日本で銅の生産が始まるのは、銅製品の生産開始よりかなり遅れたようである。『統日本紀』にみえる飛鳥時代末、文武天皇2年(698年)の因幡国からの銅鉞献上の記事より古くさかのぼる銅生産の証拠は、みつかっていない。弥生時代・古墳時代には、銅製品をつくるための銅は輸入されていたと思われる。鉛の同位体比による産地推定の研究からは、そのような結果が得られている(自然科学的分析の分析方法の馬淵 1995、同じく分析結果の馬淵 1986ほか)。こ

れに対して弥生時代から日本の銅の使用の可能性を久野邦雄氏が主張する（銅・青銅・銅合金の久野 1985）。弥生時代における銅材料の調達法についての諸説は、岩永省三氏によってまとめられている（岩永 1990）。

銅製品の生産が始まった後も中国・朝鮮からの銅製品の流入は続き、弥生時代には、日本独自の発達が見られる。銅剣・銅矛・銅戈・銅鐸がその代表である。中でも銅鐸はかなり独自性が強い。しかし、その銅鐸もいわゆる朝鮮式小銅鐸がもとであると思われ、全くの日本独自である青銅製品は生み出されなかった。

古墳時代から平安時代にかけて、新たな種類、型の製品と新しい製作技術が主に朝鮮からつぎつぎと伝わり、多くの種類の銅製品が盛んにつくられた。弥生時代の銅製品は鑄造のものに限られ、古墳時代になると鍛造、彫金、鍍金、金銅などのさまざまな技法の製品がつくられるようになる。その反面、弥生時代よりも銅製品に日本の独自性が目立たない。

銅製品の材質

古代までの銅製品の材質をみると、純銅と青銅がある。青銅は、銅と錫の合金である。純銅のものは、色から赤銅と呼ばれた可能性がある。青銅は、錫の含有量が増すと白くなる。古代の白銅は、現在の銅とニッケルの合金である白銅ではなく、錫の含有量の多さのために白い青銅である。正倉院の佐波理も、化学分析によると銅を主体とし、錫・鉛が若干含まれる青銅である（全般の中野 1978、自然科学的分析の中野 1989）。古代における亜鉛合金・ニッケル合金の存在については久野雄一郎氏が、調査例を報告し、その製造法を探っている（銅・青銅・銅合金の久野 1994）。古代までの銅製品の中の純銅製と青銅製の割合は明らかでない。

銅自体の材質とは言えないが、銅製品には、金銅製品が少なくない。銅の表面に鍍金（金メッキ）したものである。古代における銅への鍍金は、金を水銀で溶かしてペースト状態のアマルガムにしたものを塗っておこなう。金銅には鉄地金銅張りのものもある。鉄には金のアマルガムは付着しない。金銅と見た目が同じものに銅地金貼りがある。古墳時代の耳環には銅地金貼りのものが多くみられる。両者のちがいは、金銅では金が剥がれないことである。金銅製品がつくられ始めるのは、古墳時代である（製作技術・技法の小林 1982、同じく杉山 1991）。

銅製品の中の消長

時期ごとに種類によって、流行や廃れるものがある。代表的な種類をみてみよう。

弥生時代

銅剣・銅矛・銅戈・銅鏃・銅鐸・鏡・銅釧

古墳時代

1 序論

銅鏃・鏡・冠・耳環・刀装具・馬具

飛鳥時代～平安時代

鏡・帯金具・印章・仏像・仏具・銭貨

銅製品各論

銅製品の種類ごとに、研究の現状と課題を簡単に紹介する。当然のことであるが、種類によって研究の進み方や量にちがいがあがる。銅鐸や鏡のように膨大な数でさまざまな角度からの研究論文があるものもあれば、耳環のように、ありふれた遺物でありながら研究論文のほとんどないものもある。ここでは、研究の盛んな銅製品をいくつか選んで研究の現状を紹介する。研究論文の少ないものについては、この後の「文献解題」をみていただきたい。

銅鏃

弥生時代から古墳時代にかけてつくられた。石鏃の形が元だと考えられているようで、朝鮮・中国の銅鏃との関係はあまり追究されていない。朝鮮・中国製と思われる銅鏃は出土しているが、例は少ない。弥生時代の銅鏃は実用的なものが中心と思われるが、中には多くの孔が開けられた儀器的と思えるものもある。同じ武器でありながら、儀器化がひどく進んだ銅剣・銅矛・銅戈とは様相を異にしている。古墳時代前期になると、弥生時代以来の伝統的な形とはちがった形で古墳への副葬用の儀器と考えられる類がつくられ始める。それらの銅鏃の出現と消滅は、古墳時代の政治情勢を反映すると考えられている(川西 1990、松木 1991)。この点でも、古墳時代になると姿を消す銅剣・銅矛・銅戈とはちがっている。近い関係にある鉄鏃との関係についての研究は、弥生時代については大村論文(大村 1984)、古墳時代については松木論文がある(松木 1991)。

銅剣・銅矛・銅戈

弥生時代の銅器の代表であり、朝鮮製のものを起源とする。朝鮮製のものと見た目に同じものが日本でもつくられている。しかし、間もなく日本で朝鮮製のものちがった形の幅広のものがつくられ始め、後になるほどより幅が広くて大きく非実用的なものに変化していく(岩永 1980・1986)。それは刃部の先端がほかの部分にくらべてひどく大きくなっていくことである。このような変化の原因について、実用の武器が祭器にされた、または実用の武器が祭器に転用されるようになったためと考えられている。実用になるものは武器、実用にならないものは武器形祭器と分ける場合もある。また武器形の木製品、石製品を青銅でつくり始めたから祭器化したのだとする意見がある(中村 1987)。

銅鐸・小銅鐸

銅鐸も弥生時代の銅器の代表であり、起源は朝鮮式小銅鐸と言われる。伝来していること、日本でよく似たものがつくられたことは確かである（佐原 1960・1978、高倉 1982・1996など）。しかし、朝鮮式小銅鐸と銅鐸の間には、文様と鱗の有無、型持たせの孔の位置と数など無視できないちがいがあり、両者は系統が別であるとの意見もある（井上 1992）。銅鐸は、小形から大形へ、鳴らして聞くから見るへと変化する考えが広く受け入れられている（佐原 1960・1979a、田中 1970）。振るから打つ、そして吊ると変化したとする意見もある（高倉 1996）。複数の系統があったとの意見も根強くある。古墳時代になるとつくられなくなる。

銅鐸は祭器であると広く考えられているが、どのような祭りに使われたものかさまざまな意見がある。そうした中、島根県の荒神谷遺跡をはじめ埋納された状態で発見される例がふえている（寺澤 1992）。

銅鐸に似た小形のものを小銅鐸と呼ぶことが多い。ところが、そのようなくくり方をすると、銅鐸との関係が大きくちがういくつかのものをひとまとめにしてしまうことになる。そのへんを佐原真氏は、朝鮮式小銅鐸・小型銅鐸・銅鐸形試作品・銅鐸形模倣品に分けるのが妥当であるとする（佐原 1983）。小銅鐸は、銅鐸の始まりと終わりの両方の時期にみられるため、銅鐸について考える上で無視できないものである。千葉県ではこれまでに8点の小銅鐸が出土している（相京 1995 第1図）。形にちがいがあるのでひとくりに扱って良いか検討の余地があると思われるが、ほかの地域に比べて数多く出土する意味を今後明らかにしていくことは課題であろう。

また、銅鐸に関連するものとして、銅鐸をかたどって土をこねて焼いてつくられた銅鐸形土製品もある。

鏡

弥生時代から平安時代まで、主として中国からの輸入が続いた。朝鮮からは、弥生時代に多鈕鏡が輸入されたことが明らかになっているが、後述するように古墳時代にも中国鏡をまねた鏡が輸入されたと推測されている。輸入する一方で日本でも鏡がつくられ、そうした鏡の多くは、中国の鏡をまねたり、中国の鏡をもとにつくり変えられた。平安時代には和鏡という日本の独自色の強い鏡が生み出された（前田 1981）。和鏡以前に日本でつくられた鏡を倭鏡と呼ぶ意見もある（田中 1979）。

中国の鏡については、数多くの著書・論文がある。六朝までの鏡と弥生時代・古墳時代の日本の鏡を合せて形式分類したものに樋口隆康氏の著書がある（樋口 1979）。中国鏡は、それを

I 序論

もとに日本でつくられた仿製鏡とともに日本の弥生時代の遺跡や古墳の年代を決める有力な手がかりである(岡村 1990)。近年の注目される意見として、舶載の漢式鏡の中に中国本土ではなく楽浪郡でつくられたものがあると指摘する西川論文(西川 1994)、3世紀に中国で後漢鏡を踏み返してつくられた鏡が多数つくられ、それが日本の古墳に副葬されているとの立木論文がある(立木 1994)。

時代ごとの概観には、弥生時代について、九州を中心とする高倉洋彰氏の一連の論文がある(高倉 1990・1995など)。古墳時代について、森下論文がある(森下 1994)。奈良時代について、唐式鏡の中野論文、杉山論文がある(中野 1972、杉山 1989・1995)。平安時代について、唐式鏡から和鏡へのあいだの八稜鏡の杉山論文があり(杉山 1991)、和鏡については広瀬都巽氏の一連の著書がある(広瀬 1913・1919・1921・1974)。

弥生時代の鏡は北部九州から東へと広まっていき、舶載品のほか小形を中心に製品もつくられた。また、つくられた鏡の破片が多く見つかっており、その中には縁が磨かれたり孔がけられたり加工されているものがある(森岡 1994ほか)。

弥生時代と古墳時代の両方に関係する議論として伝世鏡論がある。古墳に副葬された中国鏡は、弥生時代に舶載されて伝世された鏡で、首長たちが権威のよりどころを鏡から大和政権へと代えたために不要とされて副葬されたのであるとするものであり(小林 1955ほか)、鏡のありかたに古墳時代のはじまりの裏付けをみようとする考え方である。これに対して、伝世鏡とされるものは古墳時代になって首長たちの手に渡ったのだとする反論もある(高橋 1987、森 1987)。

古墳時代には、舶載品が多く輸入されると同時に、舶載品をもとに仿製品がつくられた。仿製品については、全体を扱った森下論文がある(森下 1991)。古墳時代の代表的な鏡である三角縁神獣鏡について、舶載品と言われる一群が中国製か日本製かの議論は決着をみないが、それとは別に、舶載品についても、仿製品についてもつくられた時期の細かいちがいが指摘されて来ている(新納 1991、福永 1994・1994、岸本 1995)。また、舶載品には、製作工人についても細かいちがいが指摘されている(岸本 1989)。

古墳時代の鏡をめぐる議論として、同範鏡論もある。前期についてと中・後期についての二つがある。前期の同範鏡論は、三角縁神獣鏡の同範鏡が畿内から各地へ配布されたのであり、それは大和政権による統一を示すとするものである(小林 1955ほか)。中・後期の同範鏡論は、同型鏡論とも言われ、画文帯神獣鏡などの踏み返し法で同じにつくられた鏡が畿内から各地へ配布された様子を見て取って、大和政権の動きを読取ろうとするものである(川西 1992・1993)。

奈良時代以降の鏡については、杉山洋氏・前田洋子氏が意欲的な研究をおこなっている(杉山 1989・1991、前田 1984)。海獣葡萄鏡については勝部明生氏が総合的な研究を発表してい

る(勝部 1996)。

帯金具

帯金具で飾る帯は、古墳時代に中国・朝鮮から伝来している(町田 1970、坂 1991)。日本でもつくられたようであるが(橋本 1995)、6世紀には一度みられなくなる(坂 1991)。間を置いて7世紀後半から8世紀になって再び登場する(町田 1970、田中 1991・1992)。古墳時代の帯金具については上記の町田論文・坂論文がある。古墳時代には、本来甲冑に使われたものが、やがて官人の帯にも使われたと言われる(町田 1970)。飛鳥時代以降の帯金具については、総合的にまとめたものとして田中論文がある(田中 1991・1992)。飛鳥時代以降の帯金具で飾る帯を銜帯と言うことが多い。銜帯は官人の階層を示したと考えられている。銜帯の帯金具による飾りの具合と官位制度との関係がさまざまに言われている(伊藤 1968ほか)。帯金具のうち、鉸具を除く巡方・丸柄・鉈尾は、石製や玉製のものもある。

刀装具

装飾付大刀は、古墳時代の6世紀に現れ、7世紀に姿を消す(穴沢・馬目 1989、橋本 1990)。装飾付大刀全体について変遷と帯びた社会的階層について簡潔にまとめたものに穴沢・馬目論文がある(穴沢・馬目 1989)。分類、編年が進められる一方、佩用した階層の性格の解明が試みられている(穴沢・馬目 1989、滝瀬 1986、桐原 1969、新納 1983ほか)。

馬具

馬具は古墳時代に騎馬の風習とともに伝来し、鉄製のものが中心である。平安時代から現代までつづく。そうした中で、金銅製あるいは鉄地に金銅装や金銅張をした金色の華やかな馬具は、古墳時代から飛鳥時代にほぼ限られる。

古墳時代の概要については、小野山節氏の一連の論文がある(小野山 1959・1987・1990)。つづく時代については、鈴木論文がある(鈴木 1991)。

古墳時代は、ちょうど、大陸で馬具の改良が大きく進んだ時期にあたり、轡や鐙の出現、鞍の改良がおこなわれた。そのたびに新式の馬具が伝わり、それをまねて日本でも馬具がつけられた(小野山 1959・1990、穴沢・馬目 1989)。

銭貨

弥生時代に中国から渡来している。最も古いのは戦国時代の明刀銭であり、燕と周辺のものと言われる。つづいて漢の半両銭、五銖銭、新の貨泉となる。弥生時代から古墳時代まで、よ

く知られるが、日本では銭貨はつくられなかった。

日本で最初につくられた銭貨は和同開珎であり、それは飛鳥時代の708年のことであったと言われる。しかし、決定的な証拠には欠けるものの、和同開珎より前に銭貨があるいはそれに相当するものがあつたらうという見方が広くされている(滝沢 1996)。そうしたものの一つである無文銀銭については、藤井一二氏の著書に詳しい(藤井 1991)。

和同開珎をはじめとして平安時代までに日本でつくられた12種類の銅製の銭貨を、皇朝十二銭と言う。このうち和同開珎は銀銭もあり、つづく萬年通寶のときには金銭の開基勝寶と銀銭の大平元寶が併せて鑄造された。

皇朝十二銭は、中世の出土銭の中にも一部の種類を除いてみられる。(永井 1994)。また、中世にまねてつくられた模鑄銭がある(芝田 1990、永井 1994)。

日本での貨幣のはじまりの様子は不明である。同様に平安時代に貨幣の生産と流通が止った様子と原因もよく分っていない。ともに現存の文献からは十分に明らかにできないので、発掘資料に期待される。

銅鉱・銅採掘

日本では、銅は当初、海外から輸入し、やがて、国産できるようになった。

古代までの日本に入って来た銅には、中国産のものと朝鮮産のものがあると言われる。中国大陸の銅鉱山は、いくつか発見されているが、朝鮮では弥生時代以前にさかのぼる銅鉱山は未発見である(製作技術・技法の朝鮮の李 1991)。中国の古い銅鉱山としては、湖北省の銅緑山遺跡が有名である。この遺跡は、春秋時代から前漢(西漢)時代までつづく鉱山であり、製錬遺構も発見されている。銅緑山遺跡を含む長江流域の春秋時代から戦国時代の銅鉱山・銅製錬については、殷璋璋氏の概論がある(殷 1995)。同時期の北方の銅鉱山としては、遼寧省の大井銅山などがある。前漢時代には、長江流域が銅の重要な産地で、丹陽(現在の安徽省当塗)が最も有名な銅鉱山で、丹陽郡(現在の安徽省宣城)には銅官(官営鑄銅工房)が置かれた。前漢時代の銅鉱山としては、河北省承德地区のものが調査されている(王 1984)。

古代の日本の銅鉱山としては、山口県の長登(ながのぼり)銅山が有名である。奈良の大仏の銅はここから運ばれたとされ、平安時代から近年まで採掘がおこなわれ、製錬遺構もみつまっている。銅のほかに鉛の製錬遺構と鉛の地金(インゴット)もみつまっている。長登以外では、奈良時代・平安時代の六国史によると、飛鳥時代から平安時代にかけて周防・豊前・因幡・山城などから銅を産している。武蔵国秩父の銅鉱山は、和銅の年号の由来となった銅鉱の産出地として有名であるが、相当する古代の銅鉱山の遺跡はみつからない。

奈良時代から平安時代にかけて、政府は、銅生産に関心が高かったようである。平安時代に

は豊前・長門・備後・備中・石見・摂津などの銅鉱山の開発がおこなわれ、10世紀半ば頃には、豊前・長門・備中が主要産銅国であった。平安時代には、産銅国には、採銅使を長官とする採銅所を置いて生産を奨励し、銅を中央に貢進させた。

銅製錬・精錬

説明の中で製錬と精錬を使い分ける。製錬は、鉱石から金属を抽出することを言う。精錬は、製錬の過程で、抽出する金属の純度を高める精製を言う。なお、青銅のような合金をつくることも製錬と言う。

銅を得るには、まず鉱石を砕いて粉にし、銅の含まれる部分とそうでない部分を選り分ける選鉱をおこなう。鉱石を砕くには、臼状にくぼんだ石とたたく石が使われた。長登銅山では、奈良時代の選鉱作業場跡がみつき、鉱石を砕いた石が出土している(池田 1994)。京都府銭司遺跡出土のくぼみ石も同じ用途のものであろう(加茂町教育委員会 1986)。

銅鉱石のうち赤銅鉱・孔雀石などの酸化銅鉱石は、高温で加熱すると還元反応が起きて純銅が得られる。黄銅鉱などの硫化銅鉱石は、いったん焼いてイオウ分を取り除く必要があり、焼鉱と言う。焼鉱の作業遺構と思われるものは、長登銅山でみつまっている(美東町教育委員会 1993)。

酸化銅鉱石は、製錬すると、還元されて製錬炉の底部にあたる床(とこ)に銅として溜まる。床尻銅と言う。硫化銅鉱石は、製錬炉でいったんカワと呼ばれる硫化銅・硫化鉄を中心とするものを抽出する。カワを製錬炉で再び加熱してイオウを燃やし、鉄をカラミ(鉱滓)として浮せて流し去り、炉の底にのこる銅を抽出する。製錬の際には、鉱石やカワが融けやすくする材料として、石灰や粘土を加える。

製錬によって得られる銅の地金は、さらに純度を上げるために精錬されたと思われる。

銅地金は、日本ではみつかっていないが、中国では西周時代から前漢時代のものがみつまっている。揃って円盤状であるが、真ん中がくぼんでいるものもある。銅緑山出土の銅地金の銅の含有量は90%以上である。前漢時代の長安城跡で出土したものの銅含有量は99%である(殷 1995、王 1984)。

製錬炉は、飛鳥時代～奈良時代のものが山口県の国秀遺跡で(財団法人山口県教育財団ほか 1992)、また、奈良時代と平安時代のものが長登銅山でみつまっている(美東町教育委員会 1990・1993)ほか、奈良時代のものが平城宮跡の式部省の東側の役所跡で(小池 1995)、奈良時代末か平安時代初めころのものが岩手県の藤沢遺跡で(北上市教育委員会 1989)、平安時代の9世紀前半のものが福岡県の尾崎遺跡でみつまっている(財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1992)。

銅と銅合金

銅は、元素記号Cu、比重8.945、融点は1083°Cである。本来の色は赤に近い。よく延び、熱を良く伝える。表面には自然に地の部分を保護する酸化銅の皮膜ができる。単体の自然銅として産出する例も少なくないが、多くは酸化物または硫化物（イオウと化合）の鉱石の状態で産出する。酸化銅鉱石としては赤銅鉱・藍銅鉱・孔雀石などがあり、硫化銅鉱石としては黄銅鉱・輝銅鉱などがある。日本では、硫化銅鉱石の方が多い。硫化銅鉱石は、製錬に酸化銅鉱石にくらべて高度な技術が必要である。それについては製錬・精錬の項で説明している。

銅は、錫Snとの合金である青銅の形で利用されている例が多い。青くないのに青銅と言う由来は不明である。錫の割合が増すと、融点は次第に下がり、硬さが増していく。ただし、引張り強さは錫が16%までは強くなっていくが、それを超えると下がる。鉛Pbを加えると、鑄造に都合の良い溶かした場合の流動性が良くなる。色は、純銅では金に近い赤黄色であるが、錫を加えていくと黄色味を増して白くなっていき、錫が30%くらいで銀白色に近くなる(亀井 1989)。

銅製品の成分分析にあたり留意すべき事柄として、鑄造品の場合、組成は、一般に固まるのが早かった部分では銅が多く、遅かった部分では錫が多く、また錫の含有量が非常に多いと製品の外面に錫の多い液がにじみ出る。また、組織は、冷却速度のちがいが、鑄造後の加工の有無、加熱の温度・時間などにより変わる(亀井 1989)。

古代の銅合金としては、ヒ素Asとの合金も知られる。ヒ素は、錫と同じく、銅の性質を溶かしやすく硬いものに変える。奈良時代にはヒ素との合金がかなり使われたとも言われる。ただし、山口県の長登銅山のもののようにヒ素が含まれる銅鉱があり、銅合金に含まれるヒ素の量が3%程度までであれば、製錬技術の未熟から銅鉱中のものがのこった可能性が高いと言われる(内田 1994)。

銅および銅合金の変遷については、現状では化学分析された資料数が多いとは言えないので、今後の研究にまつところが大きい。

銅製品の製作技術・技法

製作法としては、鑄造・鍛造・切金・彫金・鍍金・貼金・着色といったものがある。鑄造は、思う形に合せた鑄型をつくり、それに溶かした金属を流し込んでつくる方法である。鍛造は、思う形に、金属の板を打ちたたいて、延ばしたり、絞ったりしてつくる方法である。切金は、思う形に金属の板を切つてつくる方法である。彫金は、思う形に彫り込んだり、打ち出したり、象嵌したりしてつくる方法である。鍍金は、メッキのことである。金銅製品には、金メッキが施されている。貼金は、箔を貼り付ける装飾法である。耳環などに金が貼られている。着色は、

金属の表面を薬品などで変化させて装飾するものである。

製作法ではないが、銅は、高温で熱したあとゆっくりさます「焼きなまし」でやわらかくなる。この性質を鍛造では利用する。

古代までの銅製品の多くは鑄造である。平安時代までの鑄型には、いくつかの種類がある。材質では、石型、土型がある。石型は、石を削り出してつくる。主に弥生時代に用いられた。銅剣・銅矛・銅戈・銅鏃・鏡・銅鐸・銅釧などのものがみつまっている。弥生時代の石型の石材は、北部九州では石英—長石斑岩が多く、畿内の銅鐸のものは凝灰質砂岩が多い（唐木田 1993）。なお、朝鮮の石型はほとんどが滑石製である（李 1991）。土型は、弥生時代については畿内で銅鐸と銅戈のものがみつまっている（三好 1993）。土型は、正確には粘土と砂を混ぜた真土（まね）を焼き固めたものである。素焼の土器に近い。古代の鑄型の多くは土型である。鑄型を構造のちがいでみると、まず、ひとつの型からなる単范と2つ以上の型を組み合わせる合范がある。合范には、製品が中実で2面の鑄型を組み合わせるだけのものと、製品を中空にするための内型、中子（なかご）とも言う、を加えるものがある。後者を惣型と言う。型の製作法のちがいでみると、木や蠟でつくった原型を写し取る「込め型法」と、銅鐸や鏡のように縁を思う形にした板（規型）を回転させて外型を削り出す「挽き型法」がある。鏡について言われる踏返し法は、原型の代わりに製品を使う込め型法の一つと言えよう。さらに鑄型にはさまざまな細工が施される。溶かされた金属を湯と言う。湯を注ぐ湯口、湯が型まで達する湯道、湯の出口、鑄込みで鑄型の内部に発生するガスの抜き口が設けられる。湯が流れ込んだときにおされて内型がグラグラしないようにする必要がある。内型を外側に延長して外型で受けるようにする幅規（または木）（はばき）、金属片を内型と外型の間に置く型持たせ（けれん）、内型に金属の心棒を通してそれを外型で受ける筭（こうがい）がある。鑄型を分割する場合、合せる目安となる合い印を付ける。梵鐘などの場合、鑄型を据えるのに土坑を掘っている。

彫金は、鑿をあてて彫る技法であるが、代表的な彫り方に、線の形に彫る毛彫、三角形の跡をのこすように彫る蹴彫、魚の卵のような丸い粒状の高まりを打出すように彫る魚子（ななこ）彫、彫り下げた中にほかの種類金属をはめ込む象嵌がある。

鍍金は、金を水銀で溶かして銅製品の表面に塗り、そのあと高温で熱して水銀を蒸発させて、ヘラやブラシのようなもので磨いて金色に光り輝かす。

金工技術については、古代を中心にした毛利光俊彦氏の概論と（毛利光 1989）、技術を写真を交えて詳細に紹介したものがある（香取ほか 1986）。

なお、銅同士を接着する技法として、溶かした銀と銅の合金をハンダのように使う銀鐵がある。奈良県の飛鳥池遺跡では銀と銅の合金の細い棒が出土し、同じく漏刻施設の跡として有名な水落遺跡の小銅管にも銀鐵の痕がみつまっている（花谷 1994）。

銅製品製作工房

研究の量のちがいがから、先に工房跡を、後から工人の順で紹介する。

銅製品は、製作法では大きく鑄造のものとそれ以外の鍛造や彫金のものに分れる。日本の原始・古代では鑄造法についての発見・研究が中心で、鑄造以外の製作法についてはそれほどわかっていない。鑄造関係を中心にみていく。

弥生時代の鑄銅工房は、北部九州と近畿にあったと思われる。鑄型・羽口などの鑄造関連遺物が出土している。北部九州で出土している鑄型は銅劍・銅矛・銅戈・銅鐸・鏡・銅釧などのもので、近畿で出土している鑄型は銅劍・銅戈・銅鐸・銅釧などのものである（片岡 1993、向田 1993、平田 1993、平田 1994、三好 1993）。吉野ヶ里遺跡では鑄型・羽口・坩堝？のほか錫片がみつまっている（佐賀県教育委員会 1994）。銅鐸の鑄型は、近畿の周辺である愛知県の朝日遺跡と福井県の加戸下屋敷遺跡でもみつまっている（國下 1994）。ただし、加戸下屋敷遺跡のものは未製品である。

工房の存在をはっきりと示す銅などの金属の溶解炉は、佐賀県の安永田（やすながた）遺跡でみつまっているだけである（鳥栖市教育委員会 1985）。

銅製品の生産・流通については、銅鐸について佐原眞氏と春成秀爾氏（佐原 1980、春成 1992）、銅劍について吉田広氏（銅劍の吉田 1993）の研究がある。

古墳時代の鑄銅工房、鑄造関連遺物はみつかっていない。

飛鳥時代の鑄銅工房は、奈良県の飛鳥池遺跡・滋賀県木瓜原遺跡でみつまっている。飛鳥池遺跡では、炉跡のほか木製の原型、鑄型、坩堝、トリベ、羽口などがみつまっている。鉄製品・ガラス製品・漆製品の工房と隣合う。この遺跡の坩堝をもとにすると、ほかの遺跡で出土している坩堝と言われるものの中にはトリベではないかと疑われるものがある。坩堝とトリベは、はっきりちがっている（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1992、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1992、花谷 1994・1994a）。飛鳥池遺跡では鍛造、彫金、鍍金も併せておこなわれていたようで、それらに関わる銅製品、金銅製品、銅板の切り屑も出土している。木瓜原遺跡では、梵鐘の鑄込み用土坑がみつまっている（滋賀県文化財保護協会 1992、横田 1994、五十川 1994、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1992、神崎 1993）。併せて大規模な製鉄炉や炭窯などもみつまっている。

奈良時代の鑄銅工房は、平城京をはじめ平城京に隣り合う東大寺、大阪府太井遺跡などでみつまっている。県内では、上総国分尼寺跡で溶解炉と鑄型を据えた穴と思われる土坑がみつまっている（千葉県市原市教育委員会ほか 1981）。古代寺院跡にも、鑄造関連遺物が出土しているものがある（杉山 1983）。梵鐘鑄造工房は、岐阜県野口廃寺、兵庫県多可寺などでみつかっ

ている(神崎 1993)。平城京の鑄銅工房は、平城宮内で6か所(杉山 1990、小池 1995)、平城京内で9か所みつかったいて、炉跡・鑄型・坩堝・羽口・製品・未製品などが出土している(杉山 1990)。東大寺の鑄銅工房は、大仏殿とその西側の戒壇院との間で炉跡と鑄込み用土坑などがみつかったている(東大寺・奈良県立橿原考古学研究所 1987、中井 1994)。大阪府太井遺跡では、はっきりとした炉跡はみつかったいないものの、大量のトリベをはじめ、羽口が出土している(大阪府教育委員会ほか 1987・1990)。

東大寺の大仏は幾多の補修で初鑄の部分のごく一部であるが、鑄造・製作について、金工家による詳細な調査と研究がおこなわれている(前田ほか 1968～1975、香取 1976、奥村 1976)。

平安時代の鑄銅工房は、平安京をはじめとして、京都府銭司遺跡、山口県周防鑄銭司遺跡、福岡県大宰府遺跡などでみつかったている。県内では千葉市谷津遺跡でみつかったている。福島県番匠地遺跡では、台地に平安時代の集落があったが、中世に城普請により台地を削平した廃土中から印章・鏡などの鑄型が出土している(樫村ほか 1989)。埼玉県台耕地遺跡では、鉄製鍊炉・鍛冶炉とともに住居跡から印章の鑄型、小銅塊がみつかったている。獣脚の鑄型もみつかったているが、鉄製の獣脚が伴うので、銅製品のものではなかろう(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984)。梵鐘鑄造遺構は、福島県の山田A遺跡と向田A遺跡、富山県上野南II遺跡、滋賀県長尾遺跡、奈良県巨勢寺址、岡山県政所遺跡などがある(神崎 1993)。

平安京の鑄銅工房は、左京八条三坊二町の刀装具のもの、京都大学構内と広隆寺の梵鐘のものがみつかったているほか(下条ほか 1983、五十川 1984・1988、神崎 1993)淳和院でもみつかったている(関西文化財調査会 1996)。京都府銭司遺跡は、炉跡・小銅塊・坩堝・トリベ・羽口などがみつかったており、伝出土の和同開珎もある(加茂町教育委員会 1986)。山口県周防鑄銭司遺跡では、長年大宝ほかの銅製品、坩堝、羽口がみつかったており、伝出土の和同開珎の鑄型もある(山口市教育委員会 1978)。福岡県大宰府遺跡では、政庁と蔵司南方で炉跡・鑄型・坩堝・羽口がみつかったている(杉山 1983)。千葉市谷津遺跡では、炉跡・鑄型・坩堝・羽口がみつかったている(千葉市教育委員会 1984)。

製作工房の工人の組織や経営などのありさまについては、弥生時代の銅鐸、奈良時代の官営、私営、寺院付属、東大寺大仏ほかについて研究がある(春成 1992、杉山 1990・1983、香取 1981)。工人の流派については三角縁神獣鏡の研究がある(岸本 1989)。

銅製品製作法の研究

銅製品の製作法には鑄造、鍛造、彫金などがある。そうした中で、製作法の研究は、鑄造法についてのものが圧倒的に多い。器種では鏡の鑄造法、とりわけ三角縁神獣鏡についての議論が活発である。

I 序 論

研究の方向としては、製品の詳細な観察をもとに製作技法を復元し、それにもとづいて再現実験までおこなうようになっている（鈴木 1990、鈴木・松林 1995など）。

自然科学的分析

銅製品についておこなわれている自然科学的分析にはさまざまなものがある（田口・齊藤 1995）。外側からは見えない様子を透視するX線CTなど、成分の金属の種類や割合を分析するX線回折分析法・蛍光X線分析法・化学分析法など、特定の成分の比率をもとめる鉛同位体比法などに分けることができよう。銅製品そのものについてはないが関連するものとして、鑄造に使う石製鑄型の石の産地同定、土製鑄型の胎土分析が含まれよう。また、銅地金の製錬・精錬作業についての銅滓、銅粒などの成分分析もある。

銅製品を分析することによって明らかにしようとする事柄をみると、もっぱら製作をめぐる問題に関心が寄せられている。原料の金属の産地、石製鑄型の石の産地、金属成分の比率、鑄造品の部分ごとの金属成分の混ざり具合のちがひ、鉛の同位体比、鑄造の鑄ぐるみ・鑄掛け・型持たせほかの技法などである。今後の研究の方向として、使用痕や付着物の分析から使われ方を探ることがおこなわれても良いであろう。鏡の傷については内行花文鏡の高野論文がある（高野 1994）。

よく言われることであるが、分析法にはそれぞれ限界がある。また、分析結果から結論を導くには、一定の条件をつけたり、仮定を設けなければならない。たとえば次のような例がある。

製品の各金属の成分比率の分析の場合、サビの部分と本来の状態の部分では分析結果の値はちがってくる。本来の状態の部分でも、鑄造品では、溶けた状態の金属の湯の鑄型内のまわり方、鑄型の温度、青銅合金の成分比率によって、部分で成分比率がちがう（沢田 1983ほか）。

鉛同位体比の測定の場合、1つの産地の鉛だけで複数の産地の鉛が混ざっていないという前提がある。複数の産地の鉛が混ざっていると測定値に現れる（久野 1986）。

保存処理

銅製品は鉄製品よりも腐蝕に強いと思われがちであるが、サビの種類によっては鉄製品よりもろく、文字通り粉ごなになってしまう（肥塚 1994）。出土後は腐食の進行を抑えるようにし、遺物の状態を見きわめて早急に処置をする必要がある。また、金銅製品のように表面に加工している遺物は、表面のサビを取り除くときに遺っているものを取り過ぎないように注意する必要がある（村上 1994）。古銭のサビ取りについては、銭貨の皇朝十二銭の永井の著書（永井 1994）にふれるところがある。

遺跡調査法

銅および銅製品の生産遺跡の調査法については、大筋が示されているにすぎない(葉賀 1986)。当面、調査法の研究が進んでいる鉄および鉄製品の生産遺跡の調査法が参考にできるであろう。

千葉県における研究の現状と課題

千葉県では、弥生時代～平安時代の銅製品がさまざまな種類にわたって少なからず出土している。本書の「II 県内出土青銅製品の集成」にみえるとおりである。また、銅製品の生産については、すでにふれたように上総国分尼寺跡で奈良時代の、千葉市谷津遺跡で平安時代の鋳銅工房跡がみつまっている。

これに対して、研究の現状はどうであろうか。これもすでにふれたところがあるが、まず銅製品全体の歴史を論じるような研究はこれまで発表されていない。小銅鐸・鏡・帯金具・刀装具といった個別の種類製品の資料集成が進められているにとどまる。銅製品とその生産・流通・使用についての研究はまだまだであると言える。その理由としては、銅製品が出土することが少なくあまり目にふれないために関心が低いことが大きいと思われる。

しかしながら、つぎの「文献解題」にみえるように銅製品の研究は多様な広がりを見せている。また県内出土の銅製品は決して少なくない。本書の刊行を機会に銅製品への関心が高まり、研究が盛んになることを期待したい。銅製品は、古代には貴重品であった。そうした性格から、中央と千葉県との関係を明らかにする上での有力な手がかりのひとつになると思われる。

2. 文献解題

弥生時代から平安時代までの日本出土の青銅器とそれをめぐる研究の成果を中心に、関連する同時期およびそれ以前の中国・朝鮮の青銅器についての研究成果、さらに、青銅器の占める位置についてみる場合に参考となるであろう遺物についての研究成果にふれるものである。千葉県出土の青銅器に関するものに限っていない。銅、銅合金、銅生産、製作技術、製作実験、自然科学的分析、保存法、研究法にもふれる。

掲載する文献は、ここ20年ほどのものを中心とした。研究が活発になったことをふまえた結果である。また、網羅的ではなく、研究の動向をもとに選択した。20年より以前の文献の主要なものは、ここに掲げた文献の引用中にみることができると思われる。

分類項目の設定、文献の位置づけは、時代の前後、主題の広狭、発表順、著者の五十音順によった。

解題は、全てにあることが望ましいと思われるが、付けた方が利用しやすいと判断されたものを中心に一部に限らざるを得なかった。

なお、文献の調査と収集にあたっては、当センター図書室の協力を得たことを特に記す。

全体の構成は以下のようになっている。

全般

全般、弥生時代・古墳時代、弥生時代、古墳時代、古墳時代～平安時代、飛鳥時代～平安時代

海外との交流

渡来、日本産化、朝鮮への輸出、朝鮮の青銅器、朝鮮・中国の青銅器、中国の青銅器
銅鍬

弥生時代・古墳時代、弥生時代、古墳時代

銅剣・銅矛・銅戈

全般、銅剣・銅剣形祭器、銅矛・銅矛形祭器、銅戈・銅戈形祭器、朝鮮、中国

鋤先

鉈

銅鐸

全般、絵画、型式別専論、起源、終焉、祭祀・機能

小銅鐸

指輪

銅釧

巴形銅器

鏡

全般、舶載品、朝鮮、中国、弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良時代、平安時代、集成

鏡像

冠

垂飾付耳飾

耳環

帶金具

古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代

腰佩具

飾履

刀装具

小刀・刀子

筒形銅器

馬具・馬鐸

印章・焼印

錠前・鍵

鈴

鏡

巾着形容器

熨斗

鍔座金具

墓誌

骨蔵器

仏具

全般、荘嚴具、供養具、梵音具、僧具、密教法具

舍利具

仏像

押出仏

板彫像

I 序論

経箱・経筒

銅板経

銭貨

中国、富本銭、皇朝十二銭、出土状況

分銅

銅鋳山

銅製錬、精錬

製錬工房、精錬工房

銅、鉛

銅素材

銅・青銅・銅合金

錫

鉛

製作技術・技法

全般・通史、時代別、製品別、朝鮮、中国

鑄銅工房・鑄型

弥生時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、中国

製錬・製作実験

製錬、製作

自然科学的分析

分析方法、分析結果

保存処理

遺跡調査法

全般

全般

中村友博ほか 1985 「青銅器」『大百科事典』第8巻 平凡社

松丸道雄・松谷敏雄 1993 「青銅器」『ブリタニカ国際大百科事典』第2版 第11巻 テイビーエス・ブリタニカ

弥生時代・古墳時代

- 和田晴吾 1986 「金属器の生産と流通」近藤義郎ほか編『岩波講座 日本考古学』第3巻 生産と流通 岩波書店
金属器とあるが、弥生時代から古墳時代の青銅器について論じる。
- 合田芳正 1980 「関東地方の青銅製品について—大庭城遺跡発見の銅鏃をめぐって—」『考古学雑誌』第65巻第4号
弥生時代から古墳時代前期までの青銅器にふれる。関東地方青銅製品出土地名表と分布図が付く。

弥生時代

- 杉原荘介 1972 『日本青銅器の研究』 中央公論美術出版
鏡・剣・矛・戈・巴形銅器・有鉤銅釧・銅鐸にふれる。
- 樋口隆康編 1974 『古代史発掘』第5巻 大陸文化と青銅器—弥生時代2— 講談社
「弥生時代青銅器地名表」(鑄型を含む)・「銅鐸出土地名表」を取める。
- 後藤直ほか 1985 「第二章 青銅」森貞次郎編『稲と青銅と鉄』 日本書籍
- 西谷正編 1989 『季刊考古学』第27号 特集 青銅器と弥生社会 雄山閣
- 岡内三真 1989 「[青銅の威風と形] 弥生青銅器の盛衰」工業普通編『古代史復元』第5巻 弥生人の造形 講談社
武器形青銅祭器・銅鐸にふれる。
- 岩永省三 1990 「弥生文化の青銅器をめぐる問題は何か」鈴木公雄編『争点 日本の歴史』第1巻 原始編 新人物往来社
渡来とそのきっかけ、日本での生産開始とその評価、製作工人、原料調達法、青銅器の役割とその変化、祭器化・大型化の原因、祭祀の内容とその変化、祭器の埋納の原因、祭器の分布圏の意味、弥生時代青銅器の特質にふれる。
- 寺澤薫 1991 「弥生時代の青銅器とそのマツリ」森浩一編『考古学 その見方と解釈』(上) 筑摩書房
系譜、生産の開始、原料、銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈の編年、埋納、まつりの内容・変遷にふれる。
- 柳田康雄 1986 「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』第60号
有鉤銅釧・巴形銅器・銅鏃にふれる。
- 埋蔵文化財研究会第20回研究集会世話人編 1986 『弥生時代の青銅器とその共伴関係』埋蔵文化財研究会第20回研究集会世話人
青銅器について共伴遺物、出土遺構を集成する。第I分冊九州篇、第II分冊中国・四国篇、第III分冊近畿以東篇からなる。収められた千葉県資料は3件である。
- 三木文雄 1995 『日本出土青銅器の研究—剣・戈・矛・鏡・銅鐸—』 第一書房
図録編を含む。主に銅鐸にふれる。銅鐸の分類編年、出土遺跡、出土鑄型、時期を論じる。銅鐸出土旧国別地名表ならびに関係文献、銅鐸出土地以外の国での銅鐸破片と小銅鐸出土地名表が付く。
- 岩永省三 1987 「伝世考」岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジアの考古と歴史—岡崎敬先生退官記念論文集—』(中) 同朋舎出版
細形と中細形の銅剣・銅矛・銅戈、多鈕細文鏡、銅鐸、中国鏡にふれる。

I 序 論

武末純一 1990 「墓の青銅器、マツリの青銅器—弥生時代北九州例の形式化—」『古文化談叢』第22集

器種ごとの扱われ方の変遷をたどり、社会の変化を論じる。

高倉洋彰 1990 「第一部金属器の定着と普及 第一章青銅器文化とその動向」高倉洋彰『日本金属器出現期の研究』学生社

銅矛とその鑄型の出土状況から福岡平野の政治勢力の動向を、九州出土の銅鐸関連資料と朝鮮系小銅鐸から銅鐸の起源を論じる。また、器種ごとの分布拡大方向の一様性を論じる。

寺澤薫 1990 「青銅器の副葬と王墓の形成—北部九州と近畿にみる階級形成の特質（I）—」『古代学研究』121号

弥生時代における北九州での畿内と対照的な青銅器の副葬を、首長への共同体の規制力の弱さではなく、首長が共同体の規制を超越していたためとする。

広瀬和雄 1993 「弥生時代首長のイデオロギー形成」『大阪府立弥生博物館研究報告』第2集

青銅器副葬墓を首長のものとした上で南部朝鮮と北九州で副葬品を比較し、両地域の首長層の関係は、前1世紀半ばに、水平的から中国王朝を中心とする放射状へと変化したと指摘する。

桑原久男 1995 「弥生時代における青銅器の副葬と埋納」金関恕・置田雅昭編『西谷眞治先生古稀記念論文集 古墳文化とその伝統』勉誠社

銅鐸・銅矛・銅戈・銅剣にふれる。器種ごとの扱われ方を、複数個出土例における型式の組合わさり方、副葬例と埋納例の時期ごと、地域ごとのあり方から論じる。

乙益重隆 1981 「弥生時代の遺跡にあらわれた信仰の形態 青銅器埋納遺跡」大場磐雄責任編集『神道考古学講座』第1巻 前神道期 雄山閣

青銅器の出土遺跡は、第1巻～第6巻に地方ごとに分載する地名表を参照のこと。

森貞次郎 1981 「弥生時代の遺物にあらわれた信仰の形態」大場磐雄責任編集『神道考古学講座』第1巻 前神道期 雄山閣

銅剣・銅矛・銅戈・銅鐸・銅鏃・銅鋤先・有鈎銅釧・巴形銅器・鏡にふれる。

佐原眞 1981 「遺物 6 銅鐸と武器形青銅器」森浩一編『三世紀の考古学』中巻 三世紀の遺跡と遺物 学生社

銅鐸文化圏と銅剣・銅矛文化圏の対立という見方を批判し、両者の分布の複雑な変遷を指摘し、その意味を考察する。

田中琢 1987 「「銅鐸文化圏」と「銅剣銅矛文化圏」」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣

説の生み出された背景、出された後の研究の展開を紹介する。

古墳時代

三木文雄・小林行雄 1959 「伝統工芸と新興工芸」小林行雄編『世界考古学大系』第3巻 日本III 平凡社

2 鑄銅工芸の項で鏡・腕輪・鏡に、3 金銀工芸と鍍金の項で金銅製品にふれる。

早乙女雅博 1990 「政治的な装身具」白石太一郎編『古代史復元』第7巻 古墳時代の工芸 講談社

帯金具・冠・冠帽・垂飾付耳飾・飾履にふれる。

毛利光俊彦 1991 「2 副葬品の種類と編年 10青銅製容器・ガラス容器 A青銅製容器」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第8巻 古墳II -副葬品- 雄山閣

銅鏡・銅瓶・銅灯・熨斗にふれる。

近藤喬一 1992 「3 銅製品」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第5巻 生産と流通II 雄山閣
3世紀後半～7世紀中頃の製品にふれる。

古墳時代～平安時代

宗像神社復興期成会編 1958 『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会

第1次調査の報告書。鏡・帯金具・馬具・雛形織機などが報告される。

宗像神社復興期成会編 1961 『続沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会

第2次調査の報告書。鏡・銅釧・馬具が報告される。

第三次沖ノ島学術調査隊編著 1974 『宗像 沖ノ島』本文・図版・資料 宗像大社復興期成会

鏡・銅釧・帯金具・馬具・鈴・鐸・鐸状品・竜頭・人形（ひとがた）・雛形舟形・雛形紡織関係品・雛形琴・雛形斧・雛形容器・円板などが報告される。鏡・竜頭・雛形製品について考察が付く。

沖ノ島遺跡の年代は、4世紀～9世紀にわたる。遺物の変遷については、第三次沖ノ島学術調査隊 1974の本文「報告編 第4章沖ノ島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態 3. 祭祀遺物の変遷」がある。沖ノ島遺跡は他に類を見ない銅製品が目立つ。

飛鳥時代～平安時代

香取秀真 1932 「第四章飛鳥時代、第五章奈良時代、第六章平安時代」香取秀真『日本金工史』雄山閣

中野政樹 1961 「工芸の革新—調度と仏具— 1 金属工芸」浅野清・小林行雄編『世界考古学大系』第4巻 日本IV 歴史時代 平凡社

奈良時代までふれる。

毛利光俊彦 1989 「金属器・金工技術」金子裕之編『古代史復元』第9巻 古代の都と村 講談社

鉦山開発、官営工房組織、金属素材と合金、鑄造・鍛造・彫金・鍍金の技術と製品にふれる。

宮内庁正倉院事務所 1976 『正倉院の金工』日本経済新聞社

まとめて扱う大部の研究書。

中野政樹 1978 『正倉院の金工』（『日本の美術』No141）至文堂

鏡・火舎・薰炉・剪子・錠鍵・小盤・合子・杯・水瓶・加盤・皿・匙・箸・針・幡・鎮鐸・彩文・柄香炉・錫杖・三鈷・金具を紹介する。合せて、正倉院文書にみる奈良時代の鏡製作にあたっての金属材料・燃料・研磨材、製作体制、所要人員などを論じ、正倉院の金属製品の材料を述べ、白銅・赤銅・黄銅・佐波理について説明し、製作技術について鑄造、鍛造、彫金、鍍金の製品をそれぞれあげる。

金子裕之 1985 「平城京と祭場 III 祓と祭祀具 5 金属製祭祀具」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 本篇

平城京出土の銅人形（ひとがた）・鏡・鈴についてまとめる。

海外との交流

渡来

中国・朝鮮

- 寺澤薫 1985 「弥生時代舶載製品の東方流入」森浩一編『考古学と移住・移動』（『同志社大学考古学シリーズ』II）同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 寺澤薫 1991 「II 金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 5 中国系青銅器 [2] 日本の大陸系青銅器 ③近畿以東」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学－弥生時代篇』六興出版
- 多鈕細文鏡、細形青銅武器、中国鏡、中国銭貨、漢式三翼鏃、銅泡（釘）の出土状況を紹介する。
- 菅谷文則 1993 「4 対外交流と交易 2 遺物からみた交流と交易 B 日本へ入ったもの」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第13巻 東アジアの中の古墳文化 雄山閣

朝鮮

弥生時代

- 森貞次郎 1960 「青銅器の渡来－銅鏡、細形の銅剣、銅矛、銅戈」杉原荘介編『世界考古学大系』第2巻 日本II 平凡社
- 近藤喬一 1969 「朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開－銅矛を中心として－」『史林』第52巻1号
- 田村晃一 1977 「朝鮮半島からみた日本の青銅器」『MUSEUM』No.311
- 近藤喬一 1984 「八日・朝青銅器の諸問題」井上光貞ほか編『東アジア世界における日本古代史講座』第2巻 学生社
- 中国東北地区と朝鮮の青銅器文化の変遷を論じた後、弥生時代の青銅器について、原料の産地論争、青銅器の伝来から生産の開始そして展開の様相にふれる。
- 田村晃一 1985 「弥生文化と朝鮮半島－その交流のあり方について－」八幡一郎先生頌寿記念考古学論文集編集委員会編『日本史の黎明－八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版
- 青銅器製作技術と原料が朝鮮半島から来たと論じる。
- 西谷正 1986 「5 東アジアの中の弥生文化 2. 朝鮮半島と弥生文化」金関恕・佐原真編『弥生時代の研究』第9巻 弥生人の世界 雄山閣
- 朝鮮からの初期の青銅器は、渡来者により北部九州から近畿までもたらされたとする。
- 小田富士雄 1986 「3 輸入青銅器 1. 朝鮮半島からもたらされた青銅器」金関恕・佐原真編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 前期～後期の変遷を論じる。
- 後藤直 1987 「北部九州の舶載青銅器と共伴資料」『古文化談叢』第17集
- 下条信行 1991 「4 青銅器文化と北部九州」下条信行ほか編『新版 古代の日本』第3巻 九州・沖

繩 角川書店

南部朝鮮の青銅器文化の変遷の中での青銅器の伝来、銅剣・銅矛・銅戈・中国鏡の出土状況から、北部九州を頂点とする政治的支配体制の動向を論じる。

後藤直 1991 「II金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 1 初期の青銅器 [3] 日本の初期青銅器－弥生前期末以前」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学－弥生時代篇』六興出版 鑿・銅鏃をあげる。

西谷正 1994 「日本における韓国系青銅器」(ハングル) 財団法人韓日文化交流基金編『韓日古文化の連繫』

古墳時代

穴沢咏光・馬目順一 1989 「五副葬品は語る (二) 武器・武具と馬具 3 「金ピカ物」の世紀 金ピカ文化の源流と渡来」白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館
源流、日本での受容と普及の過程にふれる。

中村潤子 1990 「日本と朝鮮半島の金工品」『季刊考古学』第33号

古墳時代における両地域の金工品とその製作技術を比較し、日本への金工品の伝来経路を論じる。

田村晃一・藤井和夫 1992 「異文明への憧れ」田村晃一・鈴木靖民編『新版 古代の日本』第2巻 アジアからみた日本 角川書店

橋本達也 1996 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義－眉庇付冑を中心にして－」『考古学雑誌』第80巻第4号

眉庇付冑のほか帯金具・馬具・冠・耳飾・甲冑の検討から、該時期の変革は製品、技術の伝来ではなく、工人の渡来によると指摘する。

中国

金関恕 1986 「5 東アジアの中の弥生文化 1. 中国と弥生文化」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第9巻 弥生人の世界 雄山閣
錢貨・鏡にふれる。

高倉洋彰 1991 「II金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 5 中国系青銅器 [2] 日本の大陸系青銅器 ①北部九州」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学－弥生時代篇』六興出版 銅鏃、円環型銅釧、中国鏡、錢貨、銅剣、劍の把頭飾、蓋弓帽(山口県出土)と小型仿製鏡をあげるとともに、文物の伝来の量の変化を指摘し、その意味を論じる。

渡部明世 1991 「II金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 5 中国系青銅器 [2] 日本の大陸系青銅器 ②中・四国」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学－弥生時代篇』六興出版 中国鏡、蓋弓帽、錢貨、円環型銅釧をあげる。鏡片にくわしい。

日本産化

小田富士夫 1974 「日本で生まれた青銅器」樋口隆康編『古代史発掘』第5巻 大陸文化と青銅器 一 弥生時代2－ 講談社

I 序論

小型仿製鏡、巴形銅器、銅釧を中心に紹介する。

小田富士雄 1986 「4 国産青銅器 1. 日本で作った青銅器」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣

製作開始時期と祭器であるという特徴にふれる。

柳田康雄 1987 「北部九州の国産青銅器と共伴資料」『古文化談叢』第17集

朝鮮への輸出

柳田康雄 1989 「I 九州における古墳文化と朝鮮半島 一朝鮮半島における日本系遺物」福岡県教育委員会編『九州における古墳文化と朝鮮半島』 学生社

小田富士雄・武末純一 1991 「II 金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 6 日本から渡った青銅器」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇』 六興出版

下条信行 1991 「4 青銅器文化と北部九州」下条信行ほか編『新版 古代の日本』第3巻 九州・沖縄 角川書店

小田富士夫 1988 「韓国古墳出土の倭鏡」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』上巻 吉川弘文館

穴沢味光 1993 「4 対外交流と交易 2 遺物からみた交流と交易 A 日本から出ていったもの」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第13巻 東アジアの中の古墳文化 雄山閣
鏡、巴形銅器、筒形銅器、銅鏃、裝飾付大刀をあげる。

朝鮮の青銅器

後藤直 1982 「朝鮮の青銅器と土器・石器」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

岡内三眞 1989 「朝鮮の青銅器文化」『季刊考古学』第27号

李康承 1991 「II 金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 1 初期の青銅器 [2] 韓国の初期青銅器」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇』 六興出版

李健茂 1991 「II 金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 2 細形青銅武器の出現と展開 [1] 韓国式銅劍文化（細形銅劍文化）」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇』 六興出版

後藤直 1985 「朝鮮半島青銅器文化の地域性」三上次男博士喜寿記念論文集編輯委員会編『三上次男博士喜寿記念論文集 考古編』 平凡社

李榮勳 1991 「II 金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 5 中国系青銅器 [2] 韓半島南部の中国系青銅器」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇』 六興出版
鏡・錢貨・銅鏃・銅劍を紹介する。

金元竜ほか 1989『韓国の考古学』 河出書房新社

統一新羅まで時代順にふれる。

尹武炳 1972 「韓国青銅遺物の研究」（ハングル）『白山学報』12（翻訳がある。岡内三眞訳 1987『朝鮮考古学年報』3）

- 尹容鎮 1981 「韓国青銅文化研究」(ハングル)『韓国考古学報』10・11
 尹武炳 1991 『韓国青銅器文化研究』(ハングル) 藝工産業社
 全榮来 1991 『韓国青銅器時代文化研究』(日文) 新亜出版社
 国立中央博物館編 1992 『韓国の青銅器文化』(ハングル) 汎友社
 李健茂 1992 「韓国青銅儀器の研究」(ハングル)『考古学報』第28号 韓国考古学会

中国・朝鮮の青銅器

- 樋口隆康 1974 「弥生時代青銅器の源流」樋口隆康編『古代史発掘』第5巻 大陸文化と青銅器 一
 弥生時代2 一 講談社
 中国・朝鮮の青銅器文化を紹介する。
 後藤直 1985 「第二章青銅—青銅器文化の系譜」森貞次郎編『稲と青銅と鉄』 日本書籍
 中国遼寧省を中心とする遼寧青銅器文化と朝鮮の青銅器文化を論じる。
 岡内三眞 1989 「東アジアの青銅器文化」工楽善通編『古代史復元』第5巻 弥生人の造形 講談社
 岡内三眞 1991 「II金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 1初期の青銅器 [1]東ア
 ジアの青銅器」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇』 六興出版
 中国の殷代二里頭期までの初期の青銅器、東北地区の青銅器とその製作技術の変遷にふれる。
 千葉基次 1992 「4 青銅器世界との遭遇」田村晃一・鈴木靖民編『新版 古代の日本』第2巻 アジ
 アからみた古代日本 角川書店
 東北アジアの青銅器文化をこまかく分類して紹介した上で、朝鮮青銅器文化の源流・年代を論じ、弥
 生時代の青銅器の年代論さらに弥生時代の年代論にもふれる。

中国の青銅器

- 杜迺松 1995 『中国青銅器発展史』(中文) 紫禁城出版社
 清代まで時代ごとに概説する。
 朱鳳瀚 1995 『古代中国青銅器』(中文) 南開大学出版社
 戦国時代までの青銅器について総合的に、容器、量器、楽器、武器、車馬具、工具に分けて、名称を
 定め、分類をし、文様、銘文、鑄造、加工、偽物判別にふれたあと、時代順に変遷を論じる。
 李学勤 1991 『東周与秦代文明(増訂本)』(中文) 文物出版社
 第一部分で春秋戦国時代の各国史の概要を記し、第二部分で青銅器・青銅農具・銅鏡について中国全
 体の概要を記す。
 王仲殊 1984 「五、漢代銅器」王仲殊『漢代考古学概説』(中文) 中華書局
 容器・鏡と銅鉞山・製作工房に簡単にふれる。
 陳振中 1992 『青銅生産工具与中国奴隶制社会經濟』(中文) 中国社会科学出版社
 戦国時代までの工具・農具の出土資料を多数集成し、分類、編年する。鉄器の使用にもふれる。

銅鉞

I 序論

弥生時代・古墳時代

後藤守一 1919～1920 「銅鏃に就て」(一)～(七)『考古学雑誌』第10巻第1号～第11巻第3号(断続的に連載)

(一)では型式分類、石鏃・鉄鏃との関係、中国の銅鏃との関係を論じる。(二)では分布を論じる。

(三)～(六)では銅鏃出土の遺跡を論じる。(七)では巴形銅器について論じる。

森井貞雄 1985 「無茎銅鏃の分布とその意味」森浩一編『考古学と移住・移動』(『同志社大学考古学シリーズ』II) 同志社大学考古学シリーズ刊行会

弥生時代

田中勝弘 1981 「弥生時代の銅鏃について」[滋賀県考古学論叢刊行会]『滋賀考古学論叢』第1集 — 高橋曾一先生退官記念論集 — 滋賀県考古学論叢刊行会

弥生時代の銅鏃を集成し、出土遺跡の性格、特殊な例、銅鏃の実用性、出現の上限、形態分類、分布状況にふれる。90遺跡からなる出土遺跡地名表が付く。

大村直 1984 「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』第17号

弥生時代の銅鏃の型式分類と、九州と近畿における石鏃から銅鏃への転換および銅鏃と鉄鏃の関係にふれる。

田中勝弘 1986 「4 戦い 2. 鉄・銅の武器 F. 銅鏃」金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』第9巻 弥生人の世界 雄山閣

形態分類、出現と終焉、出土状況と地域性、生産方法と生産地、鉄鏃との関係にふれる。

田中勝弘 1989 「銅鏃」『季刊考古学』第27号

赤塚次郎 1995 「多孔銅鏃」『考古学フォーラム』7

吉留秀敏・茂和敏1992 「福岡市クエゾノ遺跡採集の中国製銅鏃について—日本出土の中国製三角鏃の検討—」『古文化談叢』第27集

合田芳正 1980 「関東地方の青銅製品について—大庭城遺跡発見の銅鏃をめぐって—」『考古学雑誌』第65巻第4号

大庭康夫 1982 「考察 第1章関東地方弥生時代住居址出土の銅鏃について」岡田威夫ほか編『横浜市道高速二号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1981年度』横浜市道高速二号線埋蔵文化財発掘調査団

古墳時代

坂詰秀一 1965 「東国における古墳時代の銅鏃について」『軍事史学』第2号

杉山晋作 1980 「古墳時代銅鏃の二、三について」滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会編『古代探叢』早稲田大学出版局

形態分類、関東の古墳での類型ごとの出土状況、房総での古墳以外の出土品を含めた出土状況にふれる。

三木文雄 1986 「第三章後論 第四節駒形大塚古墳出土の銅鏃について」三木文雄編『那須駒形大塚』吉川弘文館

形態分類、古墳での銅鏃の出土状況の類型にふれる。

- 川西宏幸 1990 「儀仗の矢鏃—古墳時代開始論として—」『考古学雑誌』第76巻第2号
古墳時代開始の前後での銅鏃・鉄鏃の形態の大きな変化を指摘し、その意味を論じる。
- 松木武彦 1991 「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号
鉄鏃を中心に銅鏃にもふれる。
- 松木武彦 1996 「第I部考古学的考察 16前期古墳副葬鏃群の成立過程と構成—雪野山古墳出土鉄・銅鏃の検討によせて—」雪野山古墳発掘調査団『雪野山古墳の研究 考察篇』雪野山古墳発掘調査団
(大阪大学文学部考古学研究室)
弥生時代の鏃からの成立過程を検討した上で、副葬鏃群は、首長への祭祀に伴う伝統的なもの、首長間でやりとりされたもの、中央政権から配布されたものに分かれると指摘する。
- 松木武彦 1992 「第6章考察 2銅鏃の終焉—長法寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって—」大阪大学南原古墳調査団編『長法寺南原古墳の研究』(『大阪大学文学部考古学研究報告』第2冊)。大阪大学南原古墳調査団(同じものが『長岡京市文化財調査報告書』第30冊として刊行されている)
- 松尾昌彦 1992 「銅鏃の副葬をめぐる一試考」『古代文化』第44巻第4号
銅鏃出土古墳の副葬品組成を検討し、武器・武具が主体であることを指摘し、被葬者の性格にふれる。「銅鏃出土古墳の副葬品組成」の表が付く。

銅剣・銅矛・銅戈

全般

- 岩永省三 1980 「弥生時代青銅器型式分類編年再考—剣矛戈を中心として—」『九州考古学』第55号
舶載品と製品を型式的に区別することを主目的に、銅剣・銅矛・銅戈をそれぞれ型式分類して編年する。
- 黒沢浩 1989 「武器形青銅器の生産と流通に関する素描」『明治大学考古学博物館館報』No.5
- 岩永省三 1980 「日本青銅武器出土地名表」九州歴史資料館『青銅の武器—日本金属文化の黎明—』九州歴史資料館
- 岡崎敬 1982 「付篇 銅剣・銅矛・銅戈集成—韓国出土および第1次日本製品—」唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』六興出版
銅剣・銅矛・銅戈集成表、韓国出土の銅剣・銅矛・銅戈集成図、日本出土の銅剣集成図、日本出土の銅矛集成図、日本出土の銅戈集成図、日本出土の銅剣把頭金具集成図からなる。集成図は実測図の集成。
- 岩永省三 1991 「II金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 2細形青銅武器の出現と展開 [2] 日本における青銅武器の渡来と生産の開始」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇』六興出版
- 岩永省三 1994 「日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義」『古文化談叢』第33集
銅剣・銅矛・銅戈について、細形段階における列島産開始の様子、中細形の出現の様子を確認した上で、その事実関係をもとに日本と朝鮮南部の編年の不整合を検討し、中細形の伝世を論じ、弥生時代の中期中葉以前の実年代を検討した上で、祭器化の過程を探る。

I 序論

- 岩永省三 1995 「日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義」島根県古代文化センター編『荒神谷遺跡と青銅器 科学が解き明かす荒神谷の謎』同朋舎出版
岩永 1994の同名論文のIIIを除き、若干の補訂をしたもの。
- 岩永省三 1988 「青銅武器形祭器生成考序説」永井昌文教授退官記念論文集刊行会編『日本民族・文化の生成』六興出版
銅剣・銅矛・銅戈の祭器化の過程を明らかにし、その原因についての諸説を検討し、自説を示す。
- 中村友博 1980 「弥生時代の武器形木製品」『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度
- 新田栄治 1980 「東日本の武器形石製品」『鹿児島大学教養部史学科報告』第29号
鉄剣形石剣・有孔石剣・小形有樋式石戈・有角石器・異形武器形石製品の集成、分類、編年をし、分布を検討し、性格を考察する。
- 中村友博 1987 「3 武器形祭器」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣
木製を中心に紹介し、武器形木製品が青銅武器形祭器のもとだとする。しかし、両者は、用いられた祭祀がちがうとする。
- 田中琢 1987 「4 「銅鐸文化圏」と「銅剣銅矛文化圏」」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣
- 黒沢浩 1991 「村落支配と青銅器の所有」日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座』第4巻 政治1 [原始・古代・中世] 雄山閣
銅剣・銅矛・銅戈にふれる。

銅剣・銅剣形祭器

- 岩永省三 1986 「3 輸入青銅器 2. 銅剣」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 安井善朗 1987 「銅剣の流入と波及」岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジア考古と歴史—岡崎敬先生退官記念論文集—』(中) 同朋舎出版
- 安井善朗 1989 「銅剣」『季刊考古学』第27号
- 吉田広 1993 「銅剣生産の展開」『史林』第76巻6号
- 岩永省三 1986 「4 国産青銅器 2. 剣形祭器」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 松山市教育委員会 1991 『祝谷六丁場遺跡—調査報告1—』(松山市文化財調査報告書24) 松山市教育委員会
銅剣の埋納例。平形銅剣1点が土坑から出土。ただし、銅剣の遺存状態は極めて悪い。
- 種定淳介 1990 「銅剣形石剣試論」(上)・(下)『考古学研究』第36巻第4号・第37巻第1号

銅矛・銅矛形祭器

- 岩永省三 1986 「3 輸入青銅器 3. 銅矛」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣

- 岩永省三 1986 「4 国産青銅器 3. 矛形祭器」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 下条信行 1982 「銅矛形祭器の生産と波及」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 七田忠昭 1985 「裝飾文様を施す銅矛について－佐賀県検見谷出土銅矛を中心として－」『考古学雑誌』第70巻第4号
- 武末純一 1982 「埋納銅矛論」『古文化談叢』第9集
- 永留久恵 1982 「矛と祭り－対馬の銅矛遺跡を中心にして－」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 東潮 1986 「4 戦い 2. 鉄・銅の武器 D. 鉄矛」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第9巻 弥生人の世界 雄山閣

銅戈・銅戈形祭器

- 難波洋三 1986 「3 輸入青銅器 4. 銅戈」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 難波洋三 1986 「4 国産青銅器 4. 戈形祭器」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 三木文雄 1969 「大阪湾型銅戈について」『MUSEUM』No223
- 東潮 1986 「4 戦い 2. 鉄・銅の武器 C. 鉄戈」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第9巻 弥生人の世界 雄山閣
- 下条信行 1976 「石戈論」『史淵』第113集
- 下条信行 1982 「武器形石製品の性格－石戈再論－」『平安博物館研究紀要』第7輯
- 中村修身 1995 「石戈の分類と編年について」『地域相研究』第23号
- 中村修身 1995a 「石戈誕生の意義」『地域相研究』第23号

朝鮮

- 岡内三眞 1982 「朝鮮における銅劍の始源と終焉」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』平凡社
- 岡内三眞 1973 「朝鮮出土の銅戈」『古代文化』第25巻第9号

中国

- 秋山進午 1968・1969 「中国東北地方における初期金属器文化期の様相」『考古学雑誌』第53巻第3号・第54巻第1号・第54巻第4号
短劍を中心とする。
- 靳楓毅 1982・1983 「論中国東北地区含曲刃短劍的文化遺存」(中文)『考古学報』1982年第4期・1983年第1期
- 林巳奈夫 1972 「中国殷周時代の武器」京都大学人文科学研究所

I 序論

戦国時代までの戈・戟・矛・斧・刀・劍・弓・矢・甲冑ほかの変遷を明らかにする。

江村治樹 1983 「春秋戦国時代の銅戈・戟の編年と銘文」『東方学報』京都第52冊

吉開将人 1994 「曾侯乙墓出土戈・戟の研究－戦国前期の武器生産をめぐる一試論－」『東京大学考古学研究室紀要』第12号

鋤先

柳田康雄 1980 「青銅製鋤先」鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会編『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

柳田康雄 1989 「銅鋤先」『季刊考古学』第27号

鉞

片岡宏二 1996 「青銅製鉞考－日本出土例を中心として－」『考古学雑誌』第81巻第2号

銅鐸

全般

佐原真 1960 「銅鐸の鑄造」杉原荘介編『世界考古学大系』第2巻 日本II 平凡社

佐原氏の紐による分類編年案がはじめて示された論文。

佐原真 1964 「銅鐸」杉原荘介・大塚初重編『日本原始美術』4 青銅器 講談社

佐原真 1967 「銅鐸型式分類の研究史」(上)・(下)『考古学雑誌』第53巻第2号・第3号

中口裕 1972 「日本の青銅器 銅鐸の分類史」中口裕『改訂 銅の考古学』(『考古学選書』4) 雄山閣

中口裕 1972 「鑄造技術からみた銅鐸の分類」中口裕『改訂 銅の考古学』(『考古学選書』4) 雄山閣

鑄型の形式による分類を示す。

三木文雄 1973 『銅鐸』(『日本の美術』No88) 至文堂

佐原真 1974 「謎の祭器－銅鐸」樋口隆康編『古代史発掘』第5巻 大陸文化と青銅器－弥生時代
2－ 講談社

佐原真 1979 『銅鐸』(『日本の原始美術』7) 講談社

佐原真 1979a 「銅鐸」下中邦彦編『世界考古学事典』上 平凡社

「銅鐸の変遷」と題する代表的な例の実測図を示した形式の分類と編年の図が付く。

三木文雄 1983 『銅鐸』 柏書房

武末純一 1985 「第2章 四銅鐸」森貞次郎編『稲と青銅と鉄』 日本書籍

分類、編年、鑄造法、分布、銅鐸形土製品、機能に触れ、起源を詳しく論じる。

難波洋三 1986 「4国産青銅器 6. 銅鐸」金関恕・佐原真編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技

術II 雄山閣

型式分類について佐原分類を批判して自説を提示した上で、鑄型の外型の材質の変化時期の推定とそれから考えられる問題にふれる。

小田富士雄 1986 「銅鐸の年代と性格」桜井清彦・坂詰秀一編『論争・学説 日本の考古学』第4巻 弥生時代 雄山閣

難波洋三 1987 「銅鐸研究の現状と課題」『島根考古学会誌』第4集
難波 1986に近い内容。

国立歴史民俗博物館編(佐原眞・春成秀爾) 1995 『銅鐸の美』 毎日新聞社
銅鐸研究の歴史と現状をまとめて示す。展覧会の図録。

高倉洋彰 1996 「銅鐸の起源と文化」『戦後50年古代史発掘総まくり』(『アサヒグラフ』別冊) 朝日新聞社

銅鐸は朝鮮式銅鐸から生まれ、そして振る、打つ、吊る(見る)と変化したとする。

佐原眞 1996 『祭りのカネ銅鐸』(『歴史発掘』第8巻) 講談社

絵、紋様、作り方、祭りを柱に論じる。コラムで年代、変遷、部分名称などにふれる。

佐原眞・春成秀爾 1982 「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナル』No.210

佐原 1974の「銅鐸出土地名表」を補訂したもの。

田中巽 1986 『銅鐸関係資料集成』 東海大学出版会

野本孝明 1984 「銅鐸形土製品考」『東京考古』2

研究史、銅鐸との比較(形態・文様・出土遺構・伴出遺物・遺跡・分布)による性格推定、用途と年代の検討からなる。「銅鐸形土製品出土遺跡一覧」(木製品・石製品を含む)が付く。

絵画

佐原眞 1982 「三十四のキャンバスー連作四銅鐸の絵画の「文法」ー」小林行雄博士古稀記念論文集 刊行委員会編『考古学論考』 平凡社

春成秀爾 1991 「銅鐸絵画の原作と改作」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集

春成秀爾 1991 「絵画から記号へー弥生時代における農耕儀礼の盛衰ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集

佐原眞 1993 「多視点画から一視点画へー弥生画と子どもたちの絵ー」坪井清足さんの古稀を祝う会 編『論苑考古学』 天山舎

寺澤薫 1994 「鷲と魚とシャーマンとー銅鐸の図像考(Ⅰ)ー」森浩一編『考古学と信仰』(『同志社大学考古学シリーズ』VI) 同志社大学考古学シリーズ刊行会

寺澤薫 1995 「狩る・採る・立てるのアイデアー銅鐸の図像考(Ⅱ)ー」川崎市市民ミュージアム『弥生の食』(展示図録) 川崎市市民ミュージアム

型式別専論

進藤武 1990 「突線鈕式銅鐸の動向と予察」『野州町立歴史民俗資料館研究紀要』第2号

進藤武 1993 「三遠式銅鐸一考」『滋賀考古』第9号

I 序論

進藤武 1995 「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』第47巻第10号

起源

佐原真 1978 「朝鮮式小銅鐸と日本の銅鐸—有畜農業社会のカネから欠畜農業社会のカネへ—」賀川光夫編『宇佐—大陸文化と日本古代史—』吉川弘文館

宇野隆夫 1982 「銅鐸のはじまり」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』平凡社

朝鮮式銅鐸を分類、編年し、最古の類が銅鐸のもとだとする。出現の背景にもふれる。

高倉洋彰 1982 「朝鮮式小銅鐸から銅鐸へ」『考古学ジャーナル』No.210

佐原真 1983 「銅鐸の始まりと終りと」樋口隆康ほか『展望アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集—』新潮社

高倉洋彰 1983 「銅鐸製作開始年代論の問題点」『九州考古学』第48号

岩永省三 1984 「銅鐸年代決定論」『古文化談叢』第13集

製作年代決定のためのさまざまな方法をあげて、方法ごとに過去の研究を検討し、その結果を総合して、成立年代にふれる。

春成秀爾 1984 「最古の銅鐸」『考古学雑誌』第70巻第1号

岩永省三 1985 「銅鐸の製作開始の年代」『帝塚山考古学』No.5

春成秀爾 1989 「九州の銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号

小田富士雄 1991 「II金属器をめぐる日韓交渉：弥生前期末～後期前半 4 銅鐸の出現」小田富士夫・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』六興出版

福島日出海 1991 「朝鮮小銅鐸と銅鐸の間に」児島隆人先生喜寿記念事業会編『古文化論叢 児島隆人先生喜寿記念論集』児島隆人先生喜寿記念事業会

井上洋一 1992 「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』第28号

朝鮮小銅鐸は、その盛行時期が銅鐸の出現より後であって、銅鐸とは鑄造法、文様の有無、出土状態で相違点があり、銅鐸の祖形とはいえないと論じる。

春成秀爾 1994 「銅鐸の起源と年代」明治大学考古学博物館編『論争と考古学』（『市民の考古学』

1) 名著出版

終焉

丸山竜平 1980 「銅鐸の終焉」『日本歴史』第367号

佐原真 1983 「銅鐸の始まりと終りと」樋口隆康ほか『展望アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集—』新潮社

森岡秀人 1995 「銅鐸の終焉をめぐる諸問題」『古代文化』第47巻第10号

生産から埋納・廃棄までの銅鐸の動き、終焉の実年代、分布の偏りの意味、生産の停止の状況・要因、東国の銅鐸祭祀にふれる。

祭祀・機能

- 三品彰英 1968 「銅鐸小考」『朝鮮学報』第49輯（三品彰英 1973 『三品彰英論文集』第5巻 古代祭政と穀霊信仰 平凡社に収める）
- 田中琢 1970 「「まつり」から「まつりごと」へ」坪井清足・岸俊男編『古代の日本』第5巻 近畿角川書店
「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への変化を指摘し、さらに銅鐸の集積と政治的な統合との関連を論じる。
- 田中琢 1987 「4「銅鐸文化圏」と「銅剣銅矛文化圏」」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』第61巻第2号
銅鐸の古式と新式の分布と漢中期の鏡の分布を検討し、関連させ、鏡の伝世、銅鐸地域と鏡地域への分裂、三角縁神獣鏡の配布状況にふれる。
- 森岡秀人 1975 「銅鐸と高地性集落」『芦の芽』27 芦の芽グループ
- 春成秀爾 1978 「銅鐸の埋納と分布の意味」『歴史公論』第4巻第3号 雄山閣
- 春成秀爾 1982 「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 篠川賢 1979 「銅鐸祭祀の終焉に関する一考察」『日本歴史』第373号
- 春成秀爾 1987 「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集
- 寺澤薫 1992 「銅鐸埋納論」(上)・(下)『古代文化』第44巻第5号・第6号連載
- 春成秀爾 1992 「青銅器の祭り」稲田孝司・八木充編『新版 古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
銅鐸をめぐる祭りを中心に論じる。
- 前田敬彦 1995 「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」『古代文化』第47巻第10号

小銅鐸

- 佐原眞 1978 「朝鮮式小銅鐸と日本の銅鐸—有畜農業社会のカネから欠畜農業社会のカネへ—」賀川光夫編『宇佐—大陸文化と日本古代史—』吉川弘文館
- 常松幹雄 1985 「小銅鐸の分布とその背景—小銅鐸の史的位位置づけをめぐる—」滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会編『古代探叢 滝口宏先生古稀記念考古学論集』早稲田大学出版局
- 後藤直 1986 「3 輸入青銅器 6. 馬鈴・小銅鐸」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 中井貞夫 1987 「所謂「小銅鐸」について」『ヒストリア』第117号
集成し、小形銅鐸・小銅鐸・銅鐸形銅製品・朝鮮式小銅鐸に分類し、各類の間の系譜関係を指摘する。
- 富樫雅彦・徳澤啓一 1995 「小銅鐸の基礎的研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第11輯
集成し、小銅鐸全体の分布を検討し、朝鮮式小銅鐸・朝鮮式系小銅鐸・小型銅鐸・銅鐸型銅製品に分けて部分ごとの形態を比較するとともに、この四者それぞれの地域差をもとめる。「小銅鐸集成表」が付く。
- 相京邦彦 1995 「東日本における『小銅鐸』の終焉」『古代文化』第47巻第10号

I 序論

梶山林繼 1985 「安房における鐸鈴のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集・本編

指輪

橋口達也 1987 「11装身具2. 腕輪・指輪」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣

銅釧

杉原荘介 1972 「八 有鉤銅釧」杉原荘介『日本青銅器の研究』中央公論美術出版

小田富士雄 1974 「日本で生まれた青銅器 銅釧」樋口隆康編『古代史発掘』第5巻 大陸文化と青銅器 - 弥生時代2 - 講談社

小田富士雄 1984 「弥生時代円環型銅釧考-日韓交渉資料の一研究-」『古文化談叢』第13集

木下尚子 1982 「V 縄文時代晩期～弥生時代 3 弥生時代特論 [5] 貝輪と銅釧」唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』六興出版

[集成表6] 第51表 弥生時代銅釧の出土地名表を含む。

木下尚子 1983 「貝輪と銅釧の系譜」『季刊考古学』第5号

岡内三眞 1986 「3 輸入青銅器 7. 貨幣・銅釧その他の輸入青銅器」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣

橋口達也 1987 「11装身具2. 腕輪・指輪」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣

井上洋一 1989 「銅釧」『季刊考古学』第27号

高橋徹 1994 「桜馬場遺跡および井原鍵溝遺跡の研究-国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふまえて-」『古文化談叢』第32集

有鉤銅釧を分類、編年する。

小高幸男 1989 「古墳出土釧の基礎的研究-金属製釧について-」『君津郡市文化財センター研究紀要』3

古墳出土例を集成、分類、編年する。

岡田威夫 1975 「関東地方出土の銅釧について-世田谷区立総合運動場遺跡出土例を中心として-」『世田谷区史料』第8集

古墳時代のものを中心に、集落跡・古墳・横穴の出土例を集成、分類し、型式ごとの古墳での出土状況、出土古墳の年代を検討する。

巴形銅器

杉原荘介 1972 「七 巴形銅器」杉原荘介『日本青銅器の研究』中央公論美術出版

三島格 1973 「鉤の呪力-巴形銅器とスイジガイ(南島資料2)-」『古代文化』第25巻第5号

- 小田富士雄 1974 「日本で生まれた青銅器 巴形銅器」樋口隆康編『古代史発掘』第5巻 大陸文化と青銅器 - 弥生時代2 - 講談社
- 後藤直 1986 「4 国産青銅器 7. 巴形銅器」金関恕・佐原真編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
- 隈昭志 1989 「巴形銅器」『季刊考古学』第27号
- 高橋徹 1994 「桜馬場遺跡および井原鍬溝遺跡の研究-国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふまえて-」『古文化談叢』第32集
巴形銅器を分類、編年する。
- 木下尚子 1982 「〔集成表3〕第43表 弥生時代巴形銅器出土地名表」唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』六興出版

鏡

全般

- 富岡謙蔵 1920 『古鏡の研究』 丸善
論文集。「日本出土の支那古鏡」、「再び日本出土の支那古鏡に就いて」、「支那古鏡図説」、「同(補遺)」、「漢代より六朝に至る年号銘ある古鏡に就いて」、「王莽時代の鏡鑑と後漢の年号銘ある古鏡に就いて」、「年号銘ある支那古鏡に就いて」、「九州北部に於ける銅剣銅鏡及び弥生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」、「九州北部出土の古鏡に就いて」、「本邦仿製古鏡に就いて」などからなる。
- 小林行雄 1965 『古鏡』 学生社
弥生～平安時代における舶載と仿製の鏡の変遷、鏡の扱われ方の変化、鑄造法の変化を論じる。
- 樋口隆康 1979 『古鏡』 新潮社
本文編と図録編からなる。中国鏡の春秋から南北朝までの形式分類を示し、日本製の鏡について、弥生時代～古墳時代の仿製鏡を中心に、独特の文様を持つものを含めて形式分類を示す。
- 森浩一編 1978 『日本古代文化の探究 鏡』 社会思想社
- 保坂三郎 1986 『古代鏡文化の研究』 雄山閣
- 高倉洋彰・車崎正彦編 1993 『季刊考古学』第43号 特集 鏡の語る古代史
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』第61巻第2号
- 和田萃 1978 「古代日本における鏡と神仙思想」森浩一編『日本古代文化の探求 鏡』 社会思想社
- 菊池誠一 1986 「日本・中国の“鏡伝承”考」『東国史論』第1号
『古事記』、『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』と中国唐代の『古鏡記』を中心に文献の記事を集成して、両国の伝承の類似を指摘し、その背景を考察する。

舶載品

- 西川寿勝 1994 「舶に載ってもたらされた鏡」文化財学論集刊行会編『文化財学論集』 文化財学論集刊行会 (奈良大学)
- 西川寿勝 1994 「我が国にもたらされた舶載鏡」『大阪府埋蔵文化財協会紀要』2

I 序論

漢式鏡は、鏡背の文様表現で線彫り式・平彫り式・半肉彫り式の3種類に分れ、鏡式ごとに彫り方が揃う傾向がある。中国、朝鮮、日本それぞれの地方ごとで3種類の彫り方の鏡の出土比率がちがう。二神二獣鏡と半肉彫り式四獣鏡で、中国と日本の出土品を比べると、中国の典型に対して日本のは亜種で、類似品が出土する楽浪郡での製作の可能性があるとする。

朝鮮

李蘭暎 1983 『韓国の銅鏡』 韓国精神文化研究所

中国

全般

梅原末治 1925 『鑑鏡の研究』 大岡山書店

論文集。「所謂王莽鏡に就いての疑問」、「獣首鏡に就いて」、「支那年号鏡の二三の新資料」、「年号銘ある支那古鏡の新資料」、「上代文化研究上の二三の新資料」、「支那古鏡の仿製に就いて」、「北朝鮮発見の古鏡」を収める。中国鏡の編年の基礎をつくる。トルキスタン・朝鮮・インドシナでの仿製を検討する。「中国古鏡概説」（『新修泉貨』所収）を加えた『増補 鑑鏡の研究』が1975年に臨川書店から刊行されている。

孔祥星・劉一曼 1984 『中国古代銅鏡』（中文） 文物出版社（翻訳がある。高倉洋彰ほか訳 1991 『図説 中国古代銅鏡史』 中国書店）

竜山時代～元代の歴史にふれる。図版も多い。

孔祥星・劉一曼 1992 『中国銅鏡図典』（中文） 文物出版社

周世榮 1993 『中国歴代銅鏡鑑定』（中文） 紫禁城出版社

孔祥星・劉一曼 1994 『中国古銅鏡』（中文） 芸術図書公司

西田守夫 1989 「中国古鏡をめぐる名称－陳列カードの表記雑感－」『MUSEOLOGY』8 実践女子大学博物館講座

方格規矩鏡、内行花文鏡、夔鳳鏡の名称の問題点を指摘して改めるべき方向を示し、「倭鏡」の語の使用を批判して仿製鏡の判別のむずかしさを指摘し、鑄造法で「同範」と「同型」を区別すべきではないとし、青銅製品に対して「白銅」と呼ぶべきではないとする。

梅原末治 1935 『漢以前の古鏡の研究』（『東方文化学院京都研究所研究報告』第6冊）

宮本一夫 1991 「戦国鏡の編年」（上）・（下）『古代文化』第42巻第4号・第6号

後藤守一 1926 『漢式鏡』 雄山閣

研究史、部分名称、文様、型式分類の大綱、20種の鏡式ごとの型式分類と年代考定、日本における漢式鏡発見地名表、日本発掘漢式鏡各説、中国鏡の概説（起源・変遷・編年）、朝鮮発見の古鏡、仿製鏡について、信仰と鏡、漢式鏡関係論文摘述などからなる。1973年に雄山閣から復刻。

梅原末治 1943 『漢三国六朝紀年鏡図説』（『京都帝国大学文学部考古学資料叢刊』第1冊）

岡村秀典 1986 「3輸入青銅器 5. 鏡 B. 中国の鏡」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣

- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻5号
蟠螭文鏡・草葉文鏡・渦状虺文鏡・鸞文鏡・星雲文鏡・異体字銘帶鏡・方格規矩四神鏡・獸帶鏡・鸞文鏡の9鏡式を型式分類し、鏡式間の型式相互の併行関係をもとめ、4期(漢鏡第1期～第4期)に編年する。
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
方格規矩四神鏡・獸帶鏡・盤竜鏡・内行花文鏡の4鏡式を型式分類し、鏡式間の型式相互の併行関係をもとめ、3期(漢鏡5期～7期)に編年する。ただし、7期の様式の具体的内容はふれない。神獸鏡・画像鏡にはふれない。
- 立木修 1994 「後漢の鏡と3世紀の鏡—楽浪出土鏡の評価と踏返し鏡」岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会編『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣出版
中国での鏡生産は、北方、南方とも2世紀後半に戦乱で断絶し、3世紀に再開されたが、そこでは後漢の鏡をもとに踏み返し法でつくるのが中心だったと論じる。
- 近藤喬一 1993 「西晋の鏡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
漢代～西晋の紀年鏡の変遷、呉・西晋の紀年墓における鏡の出土例を検討し、呉と魏・西晋鏡のちがいを論じる。また、青蓋鏡について検討し、その性格を論じる。
- 福永伸哉 1994 「魏の紀年鏡とその周辺」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第3集
魏の紀年鏡の形態の特徴をもとめ、その共通性と三角縁の形成過程などから三角縁神獸鏡は魏の鏡と論じる。
- 三木太郎 1995 「鏡の製作年代に関する従來說の問題点—方格規矩四神鏡の新資料—銘文比較を通して—」佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の伝承とアジア』吉川弘文館
銘文に基づいて方格規矩鏡と三角縁神獸鏡の年代について新説を示す。
- 樋口隆康 1982 「六朝鏡の二、三の問題」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』平凡社
5～6世紀の中国での鏡製作の中断を、紀年鏡がないことと中国の墓の副葬鏡の様相から指摘する。
- 埋蔵文化財研究会 1994 『倭人と鏡—日本出土中国鏡の諸問題—』埋蔵文化財研究会
資料集と発表要旨からなる。関東の資料はあるが、千葉県は資料はない。
- 岡村秀典 1990 「中国鏡による弥生時代年代論」『考古学ジャーナル』No.325
- 岡村秀典 1995 「楽浪出土鏡の諸問題」『考古学ジャーナル』No.392
中国鏡の編年に重要な資料群であることを指摘し、1～3世紀の出土鏡の産地の変遷にふれ、朝鮮と日本での鏡の出土状況の変化をもとに楽浪と日本をめぐる国際情勢と日本の内部の政治情勢の変化を考察する。
- 梅原末治 1945 『唐鏡大鑑』(『京都帝国大学文学部考古学資料叢刊』第3冊) 美術書院
- 沈從文 1958 『唐宋銅鏡』(中文) 文物出版社
- 孔祥星 1980 「隋唐銅鏡的類型与分期」(中文)『中国考古学会第一次年会論文集』文物出版社
- 顔娟英 1990 「唐代銅鏡文飾之内容与風格」(中文)『中央研究院歷史語言研究所集刊』第60本第2分冊
- 徐殿魁 1994 「唐鏡分期的考古学探討」(中文)『考古学報』1994年第3期

I 序 論

秋山進午 1995 「隋唐式鏡綜論」『泉屋博古館紀要』第11号

前期・後期に大別した分類、編年案を示す。海獣葡萄鏡について詳しい。生産体制にもふれる。

矢島恭介 1947 「胡州並浙江諸州の銘ある南宋時代の鏡について」『考古学雑誌』第34巻第12号

文 様

駒井和愛 1953 「第三章六朝以前鏡鑑の図紋」駒井和愛『中国古鏡の研究』岩波書店（1973年に図版を改版した第2刷が刊行されている。）

林巳奈夫 1973 「漢鏡の図柄の二、三について」『東方学報』京都第44冊

方格規矩四神鏡・三段式神仙鏡・重列式神獸鏡の文様の内容とその意味を論じる。

林巳奈夫 1978 「漢鏡の図柄の二、三について（続）」『東方学報』京都第50冊

文様中の動物像を論じる。

林巳奈夫 1982 「画像鏡の図柄若干について—隅田八幡画像鏡の原型鏡を中心に—」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』平凡社

（以上の3編の論文は、補訂のうえ、林巳奈夫 1991 『漢代の神神』臨川書店に収める）

西田守夫 1968 「神獸鏡の図像—白牙拳楽の銘文を中心にして—」『MUSEUM』No.207

西田守夫 1985 「漢式鏡の芝草紋」三上次男博士喜寿記念論文集編輯委員会編『三上次男博士喜寿記念論文集 考古編』平凡社

岡内三真 1995 「鏡背にみえる仏教図像」滝口宏先生追悼考古論集編集委員会・早稲田大学所沢校地理蔵文化財調査室編『古代探叢IV—滝口宏先生追悼考古学論集—』早稲田大学出版局

三角縁仏獣鏡・仏獣夔鳳鏡・画文帯仏獣鏡を取り上げ、それぞれを分類、編年した上で、仏像を構成する要素ごとに鏡式間のちがいを検討し、その後漢～三国時代の中国の仏教図像表現の三国間の地域差との対応関係から3つの鏡式の製作地を考察する。また、3つの鏡式の仏像表現のちがいに中国での仏教の伝来から定着までの動きがみえると指摘する。

銘 文

樋口隆康 1953 「中国古鏡銘文の類別的研究」『東方学』7（樋口隆康ほか『展望東アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集—』新潮社に収める。）

字句により銘式を設定して分類し、銘式の鏡式との関連を検討し、銘文の簡略化する傾向を指摘し、銘式の鏡の編年への有効性を指摘する。

駒井和愛 1953 「第二章六朝以前鏡鑑の銘文」駒井和愛『中国古鏡の研究』岩波書店（1973年に図版を改版した第2刷が刊行されている。）

笠野毅 1983 「清明なる鏡と天—中国古鏡が規範を内包する根拠」古墳文化研究会編『古墳文化の新視角』雄山閣

笠野毅 1987 「鏡鑑銘—漢鏡の場合—」『季刊考古学』第18号

紀年鏡による鏡の編年の方法と、紀年銘の落とし穴にふれる。

王士倫 1991 （松中由美子訳）「中国漢・六朝の銅鏡銘文」『古代学研究』第126号

内容・字句で前漢・後漢前期・後漢後期～六朝に分かれるとし、それぞれの特徴を指摘する。漢・六

朝の銘文の字に見える減筆・反転・異体・仮借・錯字の一覧表が付く。

笠野毅 1993 「漢鏡の銘文」『季刊考古学』第43号

後漢のものを中心に、漢式鏡の銘の外形、内容、修辞法にふれる。

樋口隆康 1994 「漢六朝紀年鏡新集録」『橿原考古学研究所論集』第十一 吉川弘文館

林裕己 1995 「漢式鏡紀年銘鏡集成'94」『考古学ジャーナル』No.388

前漢～南北朝（六朝）のものを集成し、年代順に表にまとめる。

三木太郎 1995 「鏡の製作年代に関する従来説の問題点—方格規矩四神鏡の新資料、銘文比較を通して—」佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館

森下章司 1995 「紀年鏡と古墳」『考古学ジャーナル』No.388

紀年鏡出土古墳の集成、分布・規模・内容の検討、入手経路の考察からなる。

出土状態

杉本憲司・菅谷文則 1978 「中国における鏡の出土状態」森浩一編『日本古代文化の探究 鏡』 社会思想社

戦国時代～南北朝の、多くは漢代の墓での出土状態を省ごとに紹介する。墓以外からの出土例にもふれる。漢鏡の中国での伝世に注意をうながす。

信仰

福永光司 1973 「道教における鏡と剣」『東方学報』京都第43冊

小南一郎 1978 「鏡をめぐる伝承—中国の場合—」森浩一編『日本古代文化の探求 鏡』 社会思想社

先秦時代と六朝以降について紹介する。後の方では、呪術や道教とのつながりに多くふれる。

菊池誠一 1986 「日本・中国の“鏡伝承”考」『東国史論』第1号

弥生時代

全般

高倉洋彰 1981 「弥生時代の鏡とその時代」『考古学ジャーナル』No.185

中期遺跡出土の多鈕細文鏡・前漢鏡、後期遺跡出土の後漢鏡・仿製鏡にふれ、小形内行花文鏡を分類する。

高倉洋彰 1981 「遺物 2 鏡」森浩一編『三世紀の考古学』（中） 三世紀の遺跡と遺物 学生社
後期遺跡出土の中国鏡と仿製鏡をまとめ、その性格にふれる。

田崎博之 1984 「北部九州における弥生時代終末前後の鏡について」『史淵』第121号

河川流域ごとの小地域支配者間の政治的結合の表象だとする。

森岡秀人 1993 「近畿地方における銅鏡の受容」『季刊考古学』第43号

最初に入ってきた多鈕細文鏡、中国鏡流入開始の時期と様相、中国鏡片と小形仿製鏡の普及、打割鏡の意義にふれる。

I 序 論

中国鏡

- 柳田康雄 1982 「三・四世紀の土器と鏡—「伊都」の土器からみた北部九州—」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 弥生時代後期の遺跡出土の中国鏡を、鏡式ごとに全国的に集成し年代を求める。
- 岡村秀典 1986 「3 輸入青銅器 5. 鏡 B. 中国の鏡」金関恕・佐原真編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
中国鏡の時期区分ごとの日本での出土状況を検討し、流入、分布、伝世にふれる。
- 高倉洋彰 1990 「第二部銅鏡と弥生時代社会 第二章弥生時代の遺跡と漢鏡」高倉洋彰『日本金属器出現期の研究』学生社
中期と後期に分けて、鏡式ごとに出土状況をまとめ、その意味を論じる。
- 田崎博之 1993 「弥生時代の漢鏡」『社会科学研究』25 愛媛大学教育学部
- 高橋徹 1994 「桜馬場遺跡および井原鎌溝遺跡の研究—国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふまえて—」『古文化談叢』第32集
中国鏡の主な鏡式の出土時期を検討する。鏡片・小型仿製鏡の意義にもふれる。
- 高倉洋彰 1993 「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
- 高倉洋彰 1995 「第三章倭の国・王と漢 2 前漢鏡に示される国と王」高倉洋彰『金印国家群の時代 東アジア世界と弥生社会』（『AOKI LIBRARY 日本の歴史』）青木書店
- 高倉洋彰 1995 「第四章金印国家群の一員へ 3 漢鏡のひろがりにもみる東アジアの一体性」高倉洋彰『金印国家群の時代 東アジア世界と弥生社会』（『AOKI LIBRARY 日本の歴史』）青木書店
- 澄田正一 1970 「四咫文鏡について」榎原考古学研究所編『日本古文化論攷』吉川弘文館

多鈕鏡

- 森本六爾 1927 「多鈕細文鏡考」『考古学研究』第1輯（森本六爾 1943 『日本考古学研究』 桑名文星堂に収める）
- 森本六爾 1935 「多鈕細文鏡の諸型式」『考古学』第6巻第7号（森本六爾 1943 『日本考古学研究』 桑名文星堂に収める）
- 宇野隆夫 1977 「多鈕鏡の研究」『史林』第60巻1号
- 西谷正 1982 「〔集成表5〕第55表 多鈕細文鏡の出土地名表」唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』六興出版
- 岩永省三 1983 「多鈕細文鏡再考」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編『文化財論叢』同朋舎出版
- 宇野隆夫 1986 「3 輸入青銅器 5. 鏡 A. 朝鮮の鏡」金関恕・佐原真編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
出土多鈕細文鏡の概要、鑄造技術、紋様の構成と変化、編年、東北アジアにおける日本出土鏡の位置からなる。
- 甲元真之 1989 「〔新取と伝統〕 大陸文化との出会い 多鈕精文鏡の系譜・多鈕鏡の型式分類」工

- 楽善通編『古代史復元』第5巻 弥生人の造形 講談社
 甲元真之 1990 「多鈕鏡の再検討」『古文化談叢』第22集
 集成、分類、編年する。
 坂梨祐子 1993 「多鈕鏡の様相と分布について—鏡背面文様帯の間区にみる個性と共通点—」『財団法人北九州教育文化事業団研究紀要』第7号
 張錫英 1986 「試論東北地区先秦銅鏡」(中文)『考古』1986年第2期

仿製鏡

- 田中琢 1979 『古鏡』(『日本の原始美術』8) 講談社
 弥生～古墳時代の鏡を紹介するが、国産の鏡に中心を置き、その成立と変遷、手本とされた舶載鏡との系譜関係を論じる。
 高橋徹 1986 「4 国産青銅器 5. 鏡」金関恕・佐原眞編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術II 雄山閣
 小型仿製鏡を紹介する。
 高倉洋彰 1990 「第二部銅鏡と弥生時代社会 第三章弥生時代の小形仿製鏡」高倉洋彰『日本金属器出現期の研究』 学生社
 集成、分類した上で、分布の意味、製作の時期と場所を論じる。「弥生時代小形仿製鏡出土地名表」を収める。『考古学雑誌』第70巻第3号所収の「弥生時代小形仿製鏡について(承前)」の改訂。
 林原利明 1990 「弥生時代終末～古墳時代前期の小形仿製鏡について—小形重圈文仿製鏡の様相—」『東国史論』第5号
 分類、編年をし、分布もふまえて意義を探る。
 林原利明 1993 「東日本の初期銅鏡」『季刊考古学』第43号
 弥生時代から古墳時代への移行期の出土例を、舶載鏡・小型仿製鏡・破鏡・鏡片に分けて集成し、特色を指摘する。
 高倉洋彰 1981 「S字状文仿製鏡の成立過程」『九州歴史資料館研究論集』7
 森岡秀人 1987 「『卍』状図文を有する近畿系弥生小形仿製鏡の変遷」横田健一先生古稀記念会編『横田健一先生古稀記念 文化史論叢』(上) 創元社
 寺澤薫 1992 「巫の鏡—「卍」字小形仿製鏡の新例とその世界—」森浩一編『考古学与生活文化』(『同志社大学考古学シリーズ』V) 同志社大学考古学シリーズ刊行会
 原鏡、系譜、性格にふれる。

破碎鏡

- 伝世鏡論の文献は古墳時代でふれる。破碎鏡と伝世鏡論とは関連する。
 高倉洋彰 1976 「弥生時代の鏡片副葬について」『九州考古学』第51号
 高橋徹 1979 「廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—」『古文化談叢』第6集
 正岡睦夫 1979 「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号
 弥生～古墳時代の例を集成と分析をし、用途と意義を考察する。

I 序論

- 小山田宏一 1992 「破碎鏡と鏡背重視の鏡」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第1集
弥生時代後期～古墳時代前期の破碎鏡出土例を集成、分析し、破碎鏡の消える原因を死生観から論じる。
- 藤丸詔八郎 1993 「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心にして—」『古文化談叢』第30集(上)
破鏡をめぐるさまざまな問題についての研究史も有益である。
- 森岡秀人 1994 「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」埋蔵文化財研究会編『倭人と鏡—日本出土中国鏡の諸問題—』別冊 埋蔵文化財研究会
破鏡の分類について、部分欠損と破碎(打割)、二次加工の有無と二次加工の種類など広く、細かくふれる。
- 西川寿勝 1995 「弥生時代終末の対外交流—破鏡の終焉をめぐる—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 —創立10周年記念論集—
破鏡の鏡式と副葬時期、仿製鏡(小形でない)の製作開始の時期と状況の検討から、舶載鏡の流入の動向と、破鏡の盛行と仿製鏡製作開始の関係を指摘する。「破鏡地名表」が付く。

古墳時代

全般

- 小林三郎 1992 「補稿 12鏡」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第9巻 古墳III 埴輪 雄山閣
古墳副葬鏡の種類(舶載・仿製)、伝世鏡論、三角縁神獸鏡、仿製鏡の出現と終焉にふれる。
- 森下章司 1994 「古墳時代の鏡」埋蔵文化財研究会関西世話人会編『倭人と鏡 その2 —3・4世紀の鏡と墳墓—』埋蔵文化財研究会関西世話人会
全体を4種類に分け、その変遷をたどり、3つの画期を指摘する。さらに鏡の時期による分布状況のちがいを指摘する。
- 埋蔵文化財研究会関西世話人会編 1994 『倭人と鏡 その2 —3・4世紀の鏡と墳墓—』埋蔵文化財研究会関西世話人会
同名の第36回埋蔵文化財研究集会の発表要旨。前期古墳の出土鏡を取り上げる。千葉県に関する報告は、沢田秀実「関東・東北地方の三角縁神獸鏡と古墳」がある。巻末に『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』掲載のものを補訂した「三角縁神獸鏡目録」・「三角縁神獸鏡地名表」が付く。
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻1号(小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店に改稿して収める。)
伝世鏡と同範鏡から古墳の発生の歴史的意義を検討する。
- 小林行雄 1956 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』(小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店に改稿して収める。)
三角縁神獸鏡、仿製鏡、副葬鏡群の新古と古墳の年代にふれる。
- 川西宏幸 1989 「古墳時代前史考—原畿内政権の提唱—」『古文化談叢』第21集
畿内においては、古墳時代の開始に先立って2世紀と3世紀の境ころから1世紀の間、中国鏡の管理がおこなわれたと指摘し、その主体を原畿内政権と呼ぶ。

- 小林三郎 1995 「鏡からみた大和政権と武蔵」大田区立郷土博物館編『武蔵国造の乱－考古学で読む『日本書紀』－』東京美術
弥生時代の鏡、三角縁神獣鏡、画文帯神獣鏡、鈴鏡を取り上げる。
- 小田富士夫 1988 「韓国古墳出土の倭鏡」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』上巻 吉川弘文館

仿製鏡

- 田中琢 1979 『古鏡』（『日本の原始美術』8）講談社
弥生～古墳時代の鏡を紹介するが、国産の鏡に中心をおき、その成立と変遷、手本とされた舶載鏡との系譜関係を論じる。
- 田中琢 1981 『古鏡』（『日本の美術』No178）至文堂
4～5世紀の仿製鏡を論じる。
- 小林三郎 1982 「古墳時代倣製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究所紀要』第21冊
もとなる舶載鏡と倣製鏡をそれぞれ分類した上で、両者の対応関係を検討する。
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻6号
全体について、内区文様の大きなちがいで系列をたて、その中を内区文様の小さなちがいで型式分類し、型式間の前後関係と併行関係を外区文様で求めて編年する。その上で、4世紀～6世紀の全体的な動向を3段階に分ける。
- 森下章司 1993 「仿製鏡の変遷」『季刊考古学』第43号
- 楠元哲夫 1993 「古墳時代仿製鏡製作年代試考」宇陀古墳文化研究会編『大和宇陀地域における古墳の研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
- 中山清隆・林原利明 1994 「小型仿製鏡の基礎的集成（1）－珠文鏡の集成－」『地域相研究』第21号
- 稲生典太郎 1976 「仿製鏡の擬銘帯と擬文字－新山古墳出土の方格規矩四神鏡をめぐる－」江上波夫教授古稀紀年事業会編『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編』山川出版社
新山古墳出土の方格規矩四神鏡の擬銘帯と擬文字の研究史をふりかえり、それをもとに擬銘帯と擬文字の研究の進め方を提案する。
- 中村潤子 1992 「鏡作り工人の文字認識の一断面－擬銘帯と擬文字－」森浩一編『考古学与生活文化』（『同志社大学考古学シリーズ』V）同志社大学考古学シリーズ刊行会
擬銘帯と擬文字の共通性、系統関係に着目すると、鏡や製作者の間の共通性、系統関係が読み取れそうだと指摘する。

伝世鏡論

- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻1号（小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店に収める）
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』第61巻第2号
- 岡村秀典 1989 「五副葬品は語る（一）三角縁神獣鏡と伝世鏡」白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館

I 序論

- 高橋徹 1986 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』第60号
舶載内行花文鏡の編年から反論する。
- 森格也 1987 「後漢鏡をめぐる諸問題」『滋賀県埋蔵文化財調査センター紀要』1
後漢鏡への畿内の関心の低さを指摘して反論する。
- 笠野毅 1993 「4 対外交流と交易 5 舶載鏡論」石野博信ほか編『古墳時代の研究』第13巻 東アジアの中の古墳文化 雄山閣
伝世鏡論への反論。

同範鏡論

前期

- 小林行雄 1961 「第三章同範鏡考」小林行雄『古墳時代の研究』青木書店
同範鏡の古墳間での分有関係が成立した事情、分有関係による古墳間の年代の関連づけの可能性について、椿井大塚山古墳の三角縁神獣鏡群を主な材料として論じる。
- 西田守夫 1970 「三角縁神獣鏡の同範関係資料」『MUSEUM』No.232
- 西田守夫 1972 「破鏡の同範関係資料—三角縁神獣鏡・三角縁竜虎鏡」『MUSEUM』No.253
- 西田守夫 1976・1978・1980 「三角縁神獣鏡の同範関係資料」(三)～(五)『MUSEUM』No.305・326・357

中・後期

- 樋口隆康 1952 「同型鏡の二三について—鳥取県普段寺山古墳出土鏡を中心にして—」『古文化』第1巻第2号(樋口隆康ほか『樋口隆康教授退官記念論集 展望東アジアの考古学』新潮社に収める)
- 小林行雄 1965 「倭の五王の時代」三品彰英編『日本書紀研究』第2冊(小林行雄 1976 『古墳文化論考』平凡社に補訂して収める)
- 時雨彰 1990 「画文帯神獣鏡の系譜」『季刊考古学』第33号
環状乳画文帯神獣鏡ほかの同型鏡の系譜、伝来時期、分有状況から政治情勢を考察する。
- 川西宏幸 1992 「同型鏡の諸問題—画文帯重列式神獣鏡—」『古文化談叢』第27集
- 川西宏幸 1993 「同型鏡の諸問題—画像鏡・細線式獣帯鏡—」『古文化談叢』第29集
- 川西宏幸 1993 「同型鏡の諸問題—画文帯環状乳仏獣鏡—」『古文化談叢』第31集
一連の論文で、鏡式ごとに、同型鏡を求め、その出土古墳の分布傾向から政治動向や社会体制を論じる。

内行花文鏡(連弧文鏡)

- 森浩一 1970 「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」榎原考古学研究所編『日本古文化論攷』吉川弘文館
大半が前期古墳出土であるとして、弥生時代の小型斜行櫛歯文様鏡の後身であると論じる。
- 山本三郎 1978 「VI考察 2. 舶載内行花文鏡の形態分類について」龍山5号墳発掘調査団編『播磨・

- 龍山5号墳発掘調査報告』(高砂市文化財調査報告6) 高砂市教育委員会
分類とおおまかな編年をする。
- 高橋徹 1986 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』第60号
舶載内行花文鏡を編年し、それをもとに伝世鏡論に反論する。
- 立木修 1993 「雲雷文帯連弧文鏡考—漢中期の鏡—」『季刊考古学』第43号
分類、製作年代、日本への伝来時期にふれる。
- 山越茂 1994 「関東地方舶載内行花文鏡私論」『財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
研究紀要』第2号
後漢時代のを分類、編年し、関東地方出土の7面を分析する。
- 池上悟 1991 「直弧文系仿製鏡について」『立正考古』第30号
- 高橋徹 1993 「古式大型仿製鏡について—奈良県桜井茶臼山古墳出土内行花文鏡の再検討を兼ねて—」
『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第17冊
大型仿製内行花文鏡を分類、編年する。
- 清水康二 1994 「仿製内行花文鏡の編年—仿製鏡の基礎的研究I—」橿原考古学研究所編『橿原考古
学研究所論集』第十一 吉川弘文館
- 高野陽子 1994 「内行花文鏡の性格—弧状擦痕・搔痕のみとめられる鏡—」森浩一編『考古学と信仰』
〔同志社大学考古学シリーズ〕VI 同志社大学考古学シリーズ刊行会
日本・朝鮮の出土例を検討し、内行花文鏡が太陽、星の信仰の対象であったとする。

方格規矩鏡(博局鏡)

- 山越茂 1974 「方格規矩四神鏡考」(上)・(中)・(下)『考古学ジャーナル』No.93・95・96
中国出土品と弥生時代の舶載品を分類、編年する。
- 藤丸詔八郎 1982 「方格規矩四神鏡の研究」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』
平凡社
舶載鏡を分類、編年する。
- 西田守夫 1986 「「方格規矩鏡」の図紋の系譜—刻婁博局去不羊の銘文をもつ鏡について—」
『MUSEUM』No.427
- 高木恭二 1991 「博局鳥文鏡の系譜」『交流の考古学』肥後考古第8号三島格会長古稀記念号
中国鏡、仿製鏡をそれぞれ分類編年し、中国鏡同士、中国鏡から仿製鏡への系譜関係を指摘する。
- 高木恭二 1993 「博局(方格規矩)鳥文鏡の系譜」『季刊考古学』第43号
- 高橋徹 1994 「桜馬場遺跡および井原鎧溝遺跡の研究—国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふ
まえて—」『古文化談叢』第32集
舶載の方格規矩鏡を分類、編年する。
- 原田三壽 1994 「正L字文を持つ規矩鏡について」『京都府埋蔵文化財情報』第52号
- 田中琢 1983 「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
編『文化財論叢』 同朋舎出版
- 北浦亜由美 1992 「仿製方格規矩鏡について」『考古学研究』第38巻第4号

I 序論

分類し、分布を検討し、小形鏡の性格にふれる。

松浦宥一郎 1983 「いわゆる仿製方格T字鏡について—桑五七号墳出土の一面の小形仿製鏡を追って—」
『小山市史研究』第5号

松浦宥一郎 1994 「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要』第29号
集成、分類し、系譜関係を指摘する。

三角縁神獸鏡

全般

西田守夫 1971 「三角縁神獸鏡の形式系譜緒説」『東京国立博物館紀要』第6号

小林行雄 1979 「三角縁波文帯神獸鏡の研究」『辰馬考古資料館 考古学研究紀要』1

集成し、文様の細部を検討し、三角縁神獸鏡全体の中での特徴を指摘する。改訂された「三角縁神獸鏡同範鏡目録」が付く。

近藤喬一 1988 『三角縁神獸鏡』（『UP考古学選書』4） 東京大学出版会

研究史を述べ、中国人学者の見解を紹介批判し、景初四年鏡の解釈をし、魏の内部と外部の状況、弥生時代～古墳時代前期の鏡の性格の変化を論じ、同範鏡の配布と分有をめぐる論議に鑄造技法の面からふれる。付表として、舶載と仿製に分けた「同範鏡の分布」を載せる。

京都大学文学部考古学研究室 1989 『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』（特別展図録） 京都大学
出土の確認できた32面全ての写真図版を載せる。併せて岡村秀典「三角縁神獸鏡研究の現状」、岸本直文「神獸像表現からみた三角縁神獸鏡」、森下章司「文様構成・配置からみた三角縁神獸鏡」を収める。「三角縁神獸鏡目録」、「三角縁神獸鏡出土地名表」が付く。

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター編 1989 『謎の鏡—卑弥呼の鏡と景初四年鏡—』 同朋舎出版

都出比呂志 1989 「前期古墳と鏡」財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター編『謎の鏡—卑弥呼の鏡と景初四年鏡—』 同朋舎出版

舶載を5群、仿製を2群に分類編年する。

樋口隆康 1992 『三角縁神獸鏡綜鑑』 新潮社

研究史、定義・型式分類・図文・銘文・化学分析（蛍光X線分析による成分分析、鉛同位体比分析）からなる。中国鏡は21種類に分けて三角縁盤竜鏡を加えて、仿製鏡は5種類に分けての説明、製作者・製作地・同型鏡か同範鏡か・鏡分配論という項目で総合的に紹介し、論じる。150面の写真図版、中国鏡と仿製鏡の集成表、三角縁大型盤竜鏡集成表、付篇に山崎一雄・室住正世・馬淵久夫「椿井大塚山出土鏡の化学成分と鉛同位体比」がある。化学分析は24面に、鉛同位体比測定は全ての32面におこなう。

王仲殊著（西嶋定生監訳） 1992 『三角縁神獸鏡』 学生社

中村潤子 1994 「三角縁神獸鏡の結跏趺座像」『考古学と信仰』（『同志社大学考古学シリーズ』VI）
同志社大学考古学シリーズ刊行会

集成し、系譜関係をさぐり、ほかの文様と合せて仏教的要素が三角縁神獸鏡には多いとし、そのこと

から製作地を考察する。

川西宏幸 1995 「三角縁仏獣鏡」『考古学フォーラム』5

仏像表現を分類し、系統をもとめ、仏像夔鳳鏡の表現と比較し、産地にふれる。

田中琢 1993 「三角縁神獣鏡研究略史」坪井清足さんの古稀を祝う会編『論苑考古学』 天山舎

岸本直文 1993 「三角縁神獣鏡研究の現状」『季刊考古学』第43号

製作地について日本・中国・朝鮮の3説を紹介し、編年について舶載と仿製の間に型式変化では断絶がないことを強調し、さらにもとになった鏡式を指摘する。

西田守夫 1993 「三角縁対置式系神獣鏡の図紋」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集

王仲殊 1994 「論日本出土の青竜三年銘方格規矩四神鏡—兼論三角縁神獣鏡为中国呉の工匠在日本所作—」(中文)『考古』1994年第8期

福永伸哉 1994 「三角縁神獣鏡の歴史的意義」埋蔵文化財研究会関西世話人会編『倭人と鏡 その2—3・4世紀の鏡と墳墓—』埋蔵文化財研究会関西世話人会
舶載品を分類編年する。

大阪府立近つ飛鳥博物館 1995 『鏡の時代—銅鏡百枚—』(特別展図録) 大阪府立近つ飛鳥博物館
舶載鏡70面、仿製鏡36面、関連する鏡5面のほか戦国時代から唐までの中国鏡16面のカラー写真を載せる。中国における銅鏡の変遷、中国鏡の中の三角縁神獣鏡、三角縁神獣鏡の図像・文様・銘、古墳と三角縁神獣鏡といった記事で、研究状況を概説する。末尾に「三角縁神獣鏡出土地名表」が付く。

近藤喬一 1983 「三角縁神獣鏡製作の契機」『考古学雑誌』第69巻第2号

白崎昭一郎 1984 「三角縁神獣鏡の一考察—三神三獣鏡を中心として—」『福井考古学会会誌』第2号

白崎昭一郎 1985 「三角縁神獣鏡の考察(その二)—吾作銘鏡を中心として—」『福井考古学会会誌』第3号

白崎昭一郎 1987 「三角縁神獣鏡の考察(その三)—景初四年銘盤竜鏡をめぐって—」『福井考古学会会誌』第5号

岡村秀典 1989 「五 副葬品は語る (一) 三角縁神獣鏡と伝世鏡」白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館

製作地論争、同範鏡の分有・配布、舶載と仿製の出土状況、特殊性にふれる。

福永伸哉 1994 「魏の紀年鏡とその周辺」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第3集

福永伸哉 1995 「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」小松和彦・都出比呂志編『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』(平成6年度科学研究費補助金(一般A)成果報告書) 大阪大学文学部

笠野毅 1994 「景初三年・正始元年・景初四年の陳氏作鏡銘の解釈」岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会編『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣出版

小林行雄 1957 「初期大和政権の勢力圏」『史林』第40巻4号(小林行雄 1961 『古墳時代の研究』に改稿して収める。同書の目次では「初期」を欠く)

三角縁神獣鏡の同範鏡の分布の東西でのちがいがから勢力圏の変化を指摘する。

舶載品

I 序論

- 小林行雄 1971 「三角縁神獣鏡の研究」『京都大学文学部紀要』第13 (小林行雄 1976 「古墳文化論考」 平凡社に補訂して収める)
- 岸本直文 1989 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第72巻5号
系統分類をおこない、複数の工人群による製作を指摘する。
- 新納泉 1991 「第3章考察 第4節権現山鏡群の型式学的位置」権現山51号墳発掘調査団編『権現山51号墳』 『権現山51号墳』刊行会
分類、編年案を示す。
- 澤田秀実 1993 「三角縁神獣鏡の製作動向」『法政考古学』第19集
岸本 1989を批判して、系統分類の新説を示す。
- 岸本直文 1995 「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」考古学研究会編『展望考古学』(考古学研究会40周年記念論集) 考古学研究会

仿製品

- 近藤喬一 1973 「三角縁神獣鏡の仿製について」『考古学雑誌』第59巻第2号
舶載鏡との系譜関係、分類、舶載・仿製両方の鑄造法にふれる。
- 小林行雄 1976 「仿製三角縁神獣鏡の研究」小林行雄『古墳文化論考』 平凡社
同範鏡を中心に文様の細部にわたる中国鏡とのちがいを指摘する。文様の比較結果から鑄型の材質と踏み返し技法使用例にふれる。
- 岸本直文 1989 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第72巻5号
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻6号
三角縁神獣鏡の分類、編年をする。
- 福永伸哉 1991 「仿製三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第1号
- 福永伸哉 1992 「仿製三角縁神獣鏡分類の視点」中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢 II』 三星出版
- 福永伸哉 1994 「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第1号

画文帯神獣鏡

- 樋口隆康 1960 「画文帯神獣鏡と古墳文化」『史林』第43巻5号 (樋口隆康ほか『展望東アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集—』 新潮社に収める)
分類し、年代をもとめ、型式ごとの製作地と流布系統を探り、4～5世紀の南九州の豪族は華南貿易をおこなっていたとする。
- 時雨彰 1989 「画文帯神獣鏡の研究—前編—」『牟邪志』第2号
中国鏡について分類し、紀年銘にふれる。
- 時雨彰 1990 「画文帯神獣鏡の研究 (後編)」『牟邪志』第3号
中国での製作、流通状況と同型鏡の古墳での出土状況をもとに、性格を考察する。
- 小山田宏一 1993 「画紋帯同向式神獣鏡とその日本への流入時期—鏡からみた「3世紀の歴史的枠組み」の予察—」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第2集

分類、編年し、日本への舶載時期を求め、その性格、三角縁神獸鏡との関係を論じる。「三角縁同向神獸鏡の分類」が付く。

そのほかの鏡式

- 梅原未治 1943 「獸首鏡について」『史林』第7巻4号
- 矢島恭介 1943 「菱鳳鏡と獸首鏡について」『考古学雑誌』第33巻第5号
- 西村俊範 1983 「双頭竜文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』第66巻1号
- 池上悟 1992 「鼈鏡の変遷」『立正考古』第31号
- 車崎正彦 1993 「鼈鏡考」久保哲三先生追悼論文集刊行委員会編『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行委員会
- 新井悟 1995 「鼈鏡の編年と原鏡の同定」『駿台史学』第95号
- 小林三郎 1979 「古墳時代初期仿製鏡の一側面－重圈文鏡と珠文鏡－」『駿台史学』第46号
- 伊藤禎樹 1967 「振文鏡小論」『考古学研究』第14巻第2号
- 名本二六雄 1982 「振文帯を持つ鏡－相の谷古墳出土鏡の占める位置－」『遺跡』第22号
- 小林三郎 1983 「振文鏡とその性格」遠藤元男先生頌寿記念会編『日本古代史論苑 遠藤元男先生頌寿記念論文集』国書刊行会
- 小沢洋 1988 「第6章調査成果と問題点 第3節振文鏡について」財団法人君津都市文化財センター『千葉県木更津市－小浜遺跡群Ⅰ 俵ヶ谷古墳群』
- 藤丸詔八郎 1994 「わが国出土の鼈鏡の様相－館蔵鏡の紹介を兼ねて－」『北九州市立考古博物館研究紀要』第1号
- 澄田正一 1970 「四咫文鏡について」榎原考古学研究所編『日本古文化論攷』吉川弘文館
- 赤塚次郎 1995 「人物禽獸鏡」『考古学フォーラム』6
- 森本六爾 1928 「鈴鏡に就いて」『考古学研究』第2年第3号（森本六爾 1943 『日本考古学研究』桑名文星堂に収める）
- 集成し、分布をしらべて鈴釧・鈴杏葉のそれとくらべ、分類し、年代にふれる。
- 西岡巧次 1986 「鈴鏡論序説」中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』同朋舎出版
- 古墳での出土状況の検討から、ほかの遺物との関連、分布の傾向、年代を求め、出現の背景を論じる。「出土古墳地名表」が付く。

副葬鏡

- 樋口隆康 1956 「古墳編年に対する副葬鏡の再活用」『考古学雑誌』第41巻第2号
- 小林三郎 1985 「古墳副葬鏡の歴史的意義」論集日本原史刊行委員会編『日本原史』吉川弘文館
- 千葉博之 1986 「副葬鏡組成による前期古墳の編年試論」『駿台史学』第68号
- 岩崎卓也 1993 「関東の前期古墳と副葬鏡」久保哲三先生追悼論文集刊行委員会編『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行委員会
- 今尾文昭 1989 「鏡－副葬品の配列から－」『季刊考古学』第28号
- 弥生時代、古墳時代前期・中期・後期での配列のされ方の変遷を、ほかの品を含めて紹介する。

I 序論

今尾文昭 1993 「古墳と鏡」『季刊考古学』第43号

弥生～古墳時代にかけての破碎状態から完形への鏡副葬の変化とその意味を論じる。

藤田和尊 1993 「鏡の副葬位置からみた前期古墳」『考古学研究』第39巻第4号

副葬面数と副葬位置の関係を指摘し、副葬位置の地域ごとの傾向をもとめて、それをもとに鏡の配布の中心の動きを論じる。

飛鳥時代・奈良時代

全般

中野政樹 1969 『和鏡』（『日本の美術』No.42）至文堂

飛鳥時代～江戸時代のもを論じる。信仰対象の鏡にもふれる。「紀年銘和鏡一覧表」が付く。

斎藤孝 1978 「古代の社寺信仰と鏡」森浩一編『日本古代文化の探求 鏡』社会思想社

奈良時代の寺院での用法、平安時代の神社での用法、平安時代の仏像胎内鏡・鏡像・懸仏・経塚埋納鏡などを紹介する。

中野政樹 1962 「奈良時代の鏡－仏教と鏡－」『MUSEUM』No.137

唐式鏡

中野政樹 1972 「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同範鏡の分布とその鑄造技術」『東京国立博物館紀要』第8号

平安時代に始まる和鏡のもとである奈良時代の舶載唐鏡とその奈良時代の模倣唐式鏡、踏返唐式鏡を海獣葡萄鏡ほか全国的に集成する。同範鏡資料を分析し、唐式鏡の流布の様相は多様であること、唐鏡をまねた国産鏡のほとんどは踏み返し技法の鑄造であることを指摘する。

片山昭悟 1994 『奈良時代の鏡－千二百年前にあこがれた紋様－』片山昭悟

唐式鏡（中国製・日本製）の集成とその一部の写真提示、奈良時代の鏡の都道府県別の集成をする。瑞雲双鸞八花鏡・花禽双鸞八花鏡・狻猊双鸞鏡・唐花六花鏡・伯牙弹琴鏡・花卉双蝶八花鏡・海獣葡萄鏡・小型海獣葡萄鏡を簡単に紹介する。

杉山洋 1989 「唐式鏡の生産と流通」横山浩一先生退官記念事業会編『横山浩一先生退官記念論文集 I 生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会

瑞雲双鸞八花鏡を対象に、踏み返しによる鑄造として大小から鑄造の順序と系列を求め、生産の様子を推定する。

杉山洋 1995 「唐式鏡の生産と流通－瑞花双身鸞八花鏡の場合－」奈良国立文化財調査研究所創立40周年記念論文集刊行会編『文化財論叢II』同朋舎出版

杉山 1989をさらに進め、鑄造方法である踏み返しによる縮小化現象を実験例から検討し、踏み返しを繰り返すことによる縮小率の理論値を求め、それをもとに瑞花双身鸞八花鏡・瑞花双身鸞八稜鏡を計測して鑄造の順序と系列を出し、複数の工房の存在を推定する。

海獣葡萄鏡